セルフ・サービス

030130

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
セルフ・サービス

【Ｎコード】
Ｎ６５０９Ｄ

【作者名】
０３０１３０

【あらすじ】
設定バラバラの習作短編集。一話完結。更新終了。

#1：学園天国

ぼくはいわゆる卵だから、自分の作品にあまり自信が持てない。創ったものに責任を持てない、って意味じゃなくて、それが面白いのかどうか、ときどきわからなくなる、という意味で。

自分の趣味を盛りだくさんにしながら、流行の要素を申し訳程度に折り込んで、結局収集がつかなくなる。それでもなんとか、それらしくしようってつじつまを合わせているときなんかは、特に実力の無さを痛感する。この作品のタイトルの下に、自分のペンネームを書いていいのかどうか、迷ってしまうときだって、ある。

誰もいなくなった、夕暮れの図書室。台詞回しやコマ割りを確認していたときのこと。

「それ、漫画？」

とつぜん、あの人が声を掛けてきた。どこから入ってきたの、と聞いたらキミが来るより前から、と言われ、いつから見てたの、と聞いたらずっと、と返ってきた。

見たことのない人だったけれど、ずっと、もっと見ていたくなる顔だった。

彼女はとても本が好きで、しかも無類の漫画好きだと言った。だから、素人のものでも、読んでみたくて仕方がないんだって。

ぼくは渋々原稿を渡した。この作品には自信があった。比較的上手く描けたし、これはもっと面白くなる、まだまだ良くしようと思って修正を加えていたくらいだ。

全ての原稿に目を通し終わると、彼女は苦笑いをして言った。

「迷いが作品に出ちゃってるよ」

その一言だけで、体の真ん中が大きく脈打って、震えた。

先輩、後輩、大人。誰に見せたって、こんなに的確に自分の作品の欠点を言ってくれる人は、今まで一人だっていなかったから。

その日から、木曜日の放課後は、彼女に原稿を見てもらう時間になった。手直しをしては見せて、たった一言の感想を貰う。踏み込んで深く聞いたりしないし、彼女もそれ以上は何も言わない。それほどまでに明確で、真っ直ぐな一言なんだ。否定もできない。できる気がしなかった。そんな馬鹿な、と思う一言が飛んできた日もあった。でもそれも、まじまじと自分の作品と向き合っていると、数時間後にはうなずけてしまうものだった。

ぼくの創作に注ぐ熱は段違いに向上した。それはもう「必死」と言ってしまってもいいほどに。いつか彼女に何も言わせない放課後を目標にして。何より、手直しをしないで、作品を劣化させて彼女に見せて、この密会が終わってしまうことが本当に恐かったから。

初めて見せた日とは季節がすっかり変わってしまったある日、いつもどおり一言を零したあと、彼女は小さめの紙袋をぼくに手渡した。口にはセロハンテープで封が成されていて、中身を伺うことはできない。

「帰ったら、開けてね」

彼女はワクワクを押し殺しながら、抑え目の声で言った。

でもぼくは、なんとなく中身の察しが付いていた。

家に帰って袋の中身を見てみると、やっぱり漫画だった。少し厚めのものが四冊。周りに、あのプチプチする奴が入っていた。余程大切なものなのだろう。

ぼくが尊敬する漫画好きの人が漫画家志望のぼくに勧めてくれた漫画だ。否が応にも期待が膨む。つまり、それだけいい作品ということ。そこに気が付いたので、先に日課の修正を済ませた。もし感化されてしまったりしたら、見損なわれてしまう気がした。自分の作風や信念は、貫くべきものだと思うから。

今日言われた部分を、今日できるだけ直す。無理をして、めちゃくちゃになってしまって怒られたこともあったから。作品がかわい

そうだと嘆かれたりもしたから。
納得とはいかないけれど、満足できる工程を終わらせて、いよいよ読書に入る。これを読み終えたら、きっと、もっと素晴らしい作品が創れるようになっているに違いない。
その本の内容は覚えていない。
数ページ開くと、青年に少女が
「迷いが作品に出ているよ」
と言われていた。
「伝えたいことしか伝えていない」
「自分の好きなことしかしていない」
「そのうちきっと、いいものができる」
耳が覚えている台詞が出てくるたび、ぼくの心は乾いて崩れた。
本を閉じて、置いて、溜息をつく。
なんだ。彼女はこの本の台詞を、役者みたいに反芻していただけなんだ。ぼくが話していたのは、彼女ではなくて、この漫画だったんだ。
両手を机に置いて、だらだらと前に突き出しながら体もそうさせる。その手で、机の上の原稿を潰し、握って、捨てた。筆記用具も参考資料も全部捨てた。捨てながら、机のへりに頭を何度もぶつけながら、声を押し殺して泣いた。

#2：気だるい余暇の過ごし方

「これは珍客だ。私もいろいろな連中に顔を見せてきましたが、ヒゲを生やした中年サラリーマンは貴方が初めてです」
「嬉しいね。嫌でも記憶に残るだろう」
「非凡な表情で愉快なことを言った人と覚えておきましょう」
「それだけじゃ寂しいな。これで、どうだ？」
「・・・なるほど。ただ、これでは貴方の顔よりも銃口の方が気になってしまいますね」
「それでもいいさ。悔しがって死ぬといい。
だが、オレはアンタと違って極悪人じゃない。殺される理由くらいは教えてやるよ。
おっと、妙な動きをするなよ。オレはこれからアンタのために語るんだ。中断したって一向に構わないんだからな」
「なるほど。お話はわかりました。それで、何故私は殺されるのでしょうか？」
「なんのことはない。復讐さ」
「復讐？　・・・ははあ」
「そう、それさ。謎だけを残した、十五年前の集団自殺。年齢も性別も身寄りもバラバラの４９名が揃いも揃って川に身投げ。その中にオレのお袋がいた。一人でオレを懸命に守り、育ててくれたお袋が何故あんな死に方をしたのか、ずっと不可解だった」
「では、答えが出た、と？」
「アンタの研究の一端だったのさ。お袋は占いをよく信じる人だった。物好きが講じて、アンタの助手として働いていた。とぼけても無駄だ。証拠はあるし、この写真の女性に覚えが無いとは言わせない」
「・・・ええ、私の右腕として、よく働いてくれていました」
「心理学者として功績を残したアンタに、お袋は殺された。いや、

お袋の死があったからこそ、アンタは今、そうやってふんぞり返っていられるんだ」
「いささか飛躍が過ぎますね」
「飛躍なもんか。アンタの論文が決定的な裏づけなんだよ」
「読んでくださったのですか。大変だったでしょうに」
「『幸福循環理論』。細かいことはよくわからなかったが要点はよくわかった。世の中の幸せの量は一定で、それが巡っている。合っているか？」
「ええ。忘れもしません。あの論文は間違いなく最高傑作でした」
「その出だしが、あの集団自殺のことだったじゃないか。事故が起きた瞬間の全世界の出生者数を調べたら、綺麗に４９人だったそうだな？」
「５０人飛び降りて一人生き残ったにも関わらず、その数値は合致していた。人類は最大の敵である偶然をすり抜けて、必然にめぐり合ったのですよ」
「これだけ揃って、何で言い逃れができると考えられるのか、オレにはわからん。どう考えても、アンタが実験のために５０人を身投げさせたとしか思えん。うまいことお袋を丸め込んで、先導させたんだろう？　催眠かも知れないが、な」
「なるほど。警察を納得させる理由は用意できても、貴方を頷かせる理屈はどうやっても出てこない。ここは素直に、白旗を揚げるとしましょう」
「・・・認めやがった・・・どこまでも悪魔だぜ、アンタ」
「実を言えば、誰かがこうやって訪れ、殺してくれるのを待っていたのかも知れませんね。今なら、そんな気がします」
「開き直ってんじゃねえ！」
「まあまあ。貴方の話を聞いたのです。私の余田話もどうか聞いてください。これが、私の最後の講義になるのですから」
「・・・」
「ありがとうございます。ではお話しましょう。

確かに、あの事故が私の仮説を裏付けた。ですが、あの論文の本当の意味は、実は、今の私たちの間にこそ、初めて活きるのです」
「あ・・・？」
「幸せは循環する、ということです。例えば、今ここに私の命がある。貴方はこれを奪うことを目的としている。しかしそうなれば、もちろん私は死ぬ。死ぬことを幸福と考えないとすれば、私の“命”という幸せは貴方の“殺す”という幸せに変わる。
はは。もっと単純な例えにしましょう。机の上にひとつのパンがあるとします。そこにお腹を空かせた二人の兄弟が来たとしましょう。二人はまず、空腹を満たしたい、という欲求、希望に駆られます。そして、パンをどうにかするはずだ。ここがポイントなのですが、もし二人でパンを分けて食べたら、それぞれが幸福を感じることができる。ただし、ひとつを丸々食べた分の幸せは得られない。ですが、独り占めしたらどうでしょう。食べられた方には満腹感と、欲しいものを手に入れられた満足感がやってくる。しかし何も食べられなかったほうには、空腹感と嫌悪感が訪れる。
おわかりですか？　どちらも、誰が得をして誰が損をしても、そこに生まれる幸福は常に一律ゼロなのです」
「オレには学がないってことだけはよくわかったよ」
「そんなに事を急がないでください。ここからの話で、やっと学問が活きてくるのですよ」
「どういうことだ？」
「私を殺しても、貴方は幸福を感じることができない。いや、幸福はおろか、達成感さえも味わうことができない」
「なんだと？　実はもう死んでいる、とか言い出すんじゃねえだろうな？」
「似たようなものです。私は生きていることに疲れてしまっているんですよ」
「莫大な遺産を抱え、出版物の印税で儲け続けてる奴の台詞か？」
「妻も娘もいます。そろそろ孫も産まれるはずです。ですがね、そ

んなことさえもどうでもいいと思えるほど、私は生きることに疲れてしまっているんですよ」
「てめえ・・・」
「これがどういうことか、おわかりですか？」
「・・・・・」
「私にとって、死こそが幸福なのです。有体（ありてい）な悪役の最後の台詞ですけれど、事実だから仕方ありませんね。
私を殺せば、貴方は幸せを得られる。そう信じてここまでやってきたのでしょう？　しかし、申し訳ない。それこそが私の幸福だったのです。
さあ、ここで応用を利かせてみましょう。世界の幸福の量は一定である。今、私に幸福をもたらせば、貴方の幸福は減る。間違いなく、減ります。絶望を与えようと思った相手に幸福を与えてしまう。貴方の人生はそれでいいのでしょうか？　もっと他に、手にすることのできる幸福が、どこかに落ちているんじゃありませんか？」
「オレは・・・幸福なんか望んじゃいない！」
「ええ。同時に、いや、それ以上に私の幸福も望んでいないのではないのですか？」
「・・・う、あああ」
「もうひとつ、いいことを教えてあげましょう。貴方のお母さんは、私に殺されたのではない。自ら死を選んだのです。５０名全員が、です。彼らは例外なく、何らかの病を抱えていた。貴方のお母さんは、インターネットを使い、死に怯え、震えている人に呼びかけ、あの大規模な実験を行ってくれたのです。そう、心酔した、私の論文の為に」
「ああ！」
銃声。

＊　＊　＊

「またカウンセリング中の自殺、ですか。先生、ちょいと言葉が刺激過ぎるんじゃありませんか？」
「いえいえ。私はあくまで、一般的なそれをしていますよ？　相手の問いに真摯に答え、誤っている道を正そうとする。しかし、私が昔書いた論文がそんなに彼らの琴線に触れたのか、どうしても結論が“死”に至ってしまう。まったく、悲しいことです」
「調べでは、例の集団自殺した方のご遺族だったそうですが」
「腕のいい助手の息子さんでした。その分理解も早かった。しかし残念ながら、どこかでねじれてしまったのでしょうな。どうしても、自分の価値観を捨てられず、言ってみればそれに殺されたようなものでした」
「ふむ」
「幸福は巡ります。しかし、それを幸福と思うか否かは、結局当人次第なのですよ。それがわからなければ、生きている限り不幸なのでしょうね」
「ご高説痛み入ります。いや、しかし申し訳ない。最近は新聞しか読んでいなくて、そういう話には疎いんですわ」
「ははは、いやいや、そのくらいが一番幸福なのかも知れませんね。いや、本当に」

#3：ブルー・リトル・リビドーズ

助走を存分に活かして、強く地を蹴って踏み切る。
両手を振り上げて身を反らして、少しでも遠くへ。
着地。靴の中に砂が入って、カッコ悪くお尻から転んでしまった。
記録係のマネージャーがメジャーを引っ張ってくる。それを待たずに砂場を去る。新記録には程遠い。
―ちぇっ、記録は出なくても、カッコよく飛びたかったな・・・。
誰にもばれないように、校舎に視線を飛ばす。
空いている窓はないかな。
人影の映っている窓はないかな。
あの人に、こんな無様なところを見られていないかな。

＊

頬杖をつきながら、ぼうっと窓の外を眺める。
いろんな部活のいろんな部員が額に汗を浮かべて励んでいる。
古書の匂いに毒されながら、僕の視線は一点に注がれていた。
走り幅跳びをしている女生徒の記録を計る、背の小さいマネージャー。
どこのクラスだろう。後輩には間違いないのだけれど、見たことがない。別の科なのだろうか。
考え出すと止まらない。名前や生い立ち、家族構成や趣味まで想像してしまう。
―恋人はいるのかな
告白なんかしないけれど、お近付きになりたいとは思う。ああいう子と一緒にデートなんかしたら、とても楽しそうじゃないか。

＊

向かいに座るのは紛れもない私の彼氏なんだけれど、どうやら先ほどから持病が再発している。ちょっとでも自分の好みの女の子がいると、その子に釘付けになってしまうんだ。

私は数学の宿題を済ませながら、ううん、それに無理矢理打ち込むことで、彼の表情から目を逸らす。別に、いつも私を見ていて欲しいわけじゃない。可愛いと言われる顔でもないし。最後にちゃんと、私のところに帰ってきてくれれば、それでいいもの。

それに、こんなことでいちいち目くじらを立てる女だと思われるのが嫌だ。本当はそれ以上に他の女を見るのが嫌なのだけれど、ほら、私にも意地とかプライドがあるから。

やれることを全部やって、いい女になって、この助兵衛に独占されてやる。

＊

ぎっちりと詰まった、純文学の総集編を一冊引き抜くと、その隙間から彼女たちが見える。男のほうはいつも通り窓の外の別の女を眺めているのだろう。ちょっと顔がいいからって調子に乗っているんだ。そんなことでは、目の前の彼女がいずれ愛想を尽かしてしまうというのに。

彼女は真剣にプリントに励みながら、時折その数倍鋭い視線で男を射抜いていた。当たり前だ。好きな男が他の女を見ていて、心中穏やかな女はいない。付き合いたてなら尚更だ。

悔しい。

オレなら、もっと彼女を幸せにしてやれるのに。そりゃあ、漫画やアニメが大好きで、３０００円以上の服なんか買ったことのないオレだけど、自信があるんだ。彼女だけを、一生見守ってやれる自信があるんだ。

でも駄目だ。今は動いちゃ駄目だ。彼女はこの“今”を望んでい

る。それを壊すなんて、彼女が可愛そうだ。
そうやって理屈を付けて、動けない日々が続いている。そろそろ半年くらいかな。そして、今日も律儀にその不名誉な記録を更新するわけだ。

＊

廊下から眺める景色は好き。平和な中庭が控えめな西日に晒されて、昼間とは全く違う一面を見せている。まあ、バンドの歌詞には使えそうにないけれど、こういうことで感性を磨くのは大切なことだと思う。
無粋な音がして、図書室から友人が出てきた。隣の家、という腐れ縁はもう十数年続いている。好きか嫌いかと聞かれたら間違いなく嫌い。だって格好悪いんだもの。でも彼は面白い。見ていて飽きない。容姿が趣味にそぐわないくらいでサヨナラしてしまうのはもったいないと思う。
ほら、ごらんよ、彼の姿を。少しうつむいて、震える両肩を抑えるのに精一杯で、顔が真っ赤じゃないか。きっと、今日も意中の女の子に声を掛けられなかったんだろう。顔も良くはないしいくらかぽっちゃりとしているから、自信がないのも仕方が無い。
お帰り、と言う。しかし彼は反応しない。プライドが高いんだ。落ち度があった自分を、みっともない自分を許せないんだ。
ホント、可愛い。
また慰めてやろう。こうなることが判っていたから待っていた。帰りに、彼が好きなジュースでも買ってあげよう。

＊

彼に会いたい。

＊

屋上で吸うタバコは美味い。学生の分際で何を粋がっているんだか、と自分でも思う日があるけれど、覚えてしまったものは仕方がない。もう煙無しでは生きていけない体なのだ。

もちろん、生徒会長がこんなことをしていることがばれたら一大事なのだけれど、理解のある顧問の教師がなんとかしてくれるらしい。つくづく、いい学校である。

柵に寄りかかる。横目で校庭を見下ろす。

この学校の生徒は活き活きしている。

いつかの日の朝、新聞で読んだことがある。最近の１０代はすぐに「面倒臭い」「意味がわからない」と言い訳をして、やりたくないことを徹底的に避ける傾向にあるそうだ。そんな連中から、この学校は最も遠い。やりたいことに打ち込み、気が進まないことにも一致団結して取り組む。それが空回りするときもしばしばあるけれど、誰もそれを咎めない。数百人の生徒が揃いも揃って、熱い連中ばかりなのだ。

そのくせ、誰もそのことに気付いていない。かく言うオレも、このポジションに就いてから気が付いた。そのことを顧問に話したら、

「やはりお前が適任だったな」

と言われた。

意味はわからない。そこから、オレの中の熱は冷めてしまったように覚えている。それさえどうだかわからない。はっきりしていることは、今のオレには比較的、全てどうでもいい、ということくらいだ。

守るべきものはオレより立派だし、放っておいても大丈夫。

嬉しいやら悲しいやら、だ。

屋上の扉が開いた。その中から、背の小さなジャージの女生徒が飛び出してきた。部活が終わってから直行か。

この後の展開を想像して、煙草を上履きで踏み潰す。

女生徒は泣き出しそうなはにかみ笑いを湛えてオレに抱きつくと、
オレの、ヤニ臭い唇に噛み付いた。

#4：HOME

彼はこの店で「チャンプ」と呼ばれていた。実際に何かの大会で優勝したわけではなく、ただ、いつの間にか常連がそう呼ぶようになり、本人もそれを快く受理した。

ほんのりと暗い店内、背中合わせに並んだ白い筐体。入り口から見ていつも左側にチャンプは座っていた。反対側では、やはり常連の友人が、一喜一憂しながらテレビゲームを楽しんでいた。

友人の後ろに回る。見慣れたキャラクターたちが忙しなく画面内を駆け巡っていた。画面の上部、体力ゲージに目を運ぶと、チャンプが大きくリードしていた。これも見慣れた光景だ。

やがて友人が敗北。苦笑いをしながら席を立ち、ぼくに促す。ぼくは会釈をしてから腰を降ろし、ポケットに忍ばせておいた百円玉を投入してスタートボタンを押した。レバーを操作し、キャラクターを選ぶ。対戦スタート。シンプルながらに奥の深いゲームで、熟練度が増せば戦力の差は歴然なものとしてプレイヤー間に立ちはだかる。ぼくは今日もそれをまざまざと見せ付けられながら、チャンプに秒殺されてしまった。

苦笑いして席を立つ。すぐに友人が座った。ぼくはチャンプに挨拶をしに反対側へ回った。

友人がキャラクターを選んでいる間に、チャンプはシャツの胸ポケットから煙草を取り出して火をつけていた。

「こんばんは」

「おう、やっぱ小田だったか」

他の筐体から出てくる効果音に消されそうな、それでいて圧倒的な存在感を持った低い声。こういうのをカリスマ性と言うんだと、常連の誰かが言っていた。

「今の連携、初めて見ました」

対戦が始まった。

「ああ。だろうね。オレもこの間たまたま見つけちゃってさ」
相変わらず、圧倒的に優勢のまま試合を運んでいくチャンプ。
「ネットとかにも上がってませんよね？」
一旦防戦に回っても丁寧に切り返す。友人も決して下手ではないのだけれど、下手だと思わざるを得ないほど、チャンプの操作は精密で巧妙だ。
「いいゲームってのは、いつまで経っても研究の余地があるんだよ。それが好きなゲームなら尚更だよな」
チャンプの勝ち。
「最初の頃に比べると、彼も強くなったよ。油断できないもんな。ま、ガチでやって負ける気はしないけど、オレも頑張らないとな、って気にはなるよな」
「これ以上頑張られたら、ぼくなんか追いつけなくなっちゃいますよ」
チャンプは笑って二セット目に臨んだ。ぼくは空いている椅子に座り、試合の様子を見守った。
やがて他の常連の人たちがやってきた。作業着、スーツ、学生服に私服。普段の生活はバラバラだけど、一日のうちこの時間だけはこのお店で時間を共にする。ひとつのゲームに対して、そして、いつも環の中心にいるチャンプに会いに。
ぼくはこの時間が、本当に大好きだった。

＊　＊　＊

それは吉報と思われた。
一ヶ月後に、隣町の大きなゲームセンターで、例のタイトルの大規模な大会が行われることになった。県内はもちろん、都会からわざわざ足を運ぶプレイヤーもいそうな、ビッグタイトル。
未だ無名のチャンプが、一躍有名になるチャンス。ぼくらのチャンプが、業界のチャンプになる日が、とうとうやってきたんだ。

店先のポスターで日時を記憶してから店内へ。いつもの席にチャンプはいた。咥え煙草で黙々と対戦を繰り返している。反対側には、常連と呼べる殆どの人が集まっていた。皆で大会に向けての調整をしながら、チャンプのテクニックから何かを学び取ろうとしている。

ぼくはまずチャンプのほうへ向かった。挨拶をしたけれど、珍しく返ってこなかった。チャンプは真顔で対戦を続けていた。でもその表情がどうにも気になった。好きなことに夢中になっている、というよりは、淡々と仕事を終わらせている、という感じで、とてもじゃないけれどチャンプらしくなかった。

「ちょっと、ちょっと」

立ち尽くしていたぼくを常連の一人が呼んだ。ぼくはチャンプの邪魔にならないように注意しながら、常連に駆け寄った。

「今は何言っても駄目だよ。チャンプ、マジになっちゃってるから」

うれしかった。

「あ、やっぱり大会に向けて、ですか？」

常連の人は眉をせばめて首を振った。

「出ないんだってさ」

「え？」

信じられなかった。

「なんでですか？　チャンプの腕なら、優勝だって狙えるでしょう？」

「俺たちだってそう言ったさ。〇〇勢の代表として頑張ってください、俺たち応援しますから、って。そしたらさ、チャンプ、人ごみが苦手だって言うんだ」

「そんなの、初めて聞きました」

「皆そうなんだよ。だから、今対戦してる奴が聞いたんだ。本当ですか、嘘でしょ、本当の理由を教えてください、って。そしたらチャンプの奴、オレに勝てたら教えてやる、って言ったんだ。だから今、皆でなんとかチャンプを倒そうとしてるんだけどさ、チャンプ、メインのキャラクターで大マジなんだよ」

それではどれだけ頑張っても勝てるわけがない。チャンプの上手さはそれほどのものだった。それは常連もチャンプも重々承知しているはずだ。だから普段、チャンプはメインのキャラクターも使わないし、連続技だって威力の低い見栄えのいいものを使う。その方が、みんな楽しめるからだ。しかし今は、確かに、使い古された最大ダメージの見込める連続技を繰り返している。

「皆、もう半ば諦めててさ。もう百円ずつ使ったら諦めて帰ろうって話してたところなんだ」

ぼくの肩の力がすっと消えた。ポケットに準備していた百円玉でコーラを買って、常連の人の隙間から遠巻きに画面を見ていた。

やがて決着が付き、そこから、ぽつりぽつりと店を後にしだした。最後の一人が挑み、負け、退店してから、ぼくはチャンプの様子を見に、反対側へ回った。

手元の灰皿は吸殻が山盛りになっていた。

チャンプがぼくに気付いた。筐体を指差し、「やる？」と表情で尋ねた。ぼくは首を何度も振って断った。

チャンプは苦笑すると、まだコンピュータ戦が残っているのに席を立ち、ぼくの隣をすり抜けて自動ドアの向こうに消えた。

ぼくは少し躊躇ってから、急いでチャンプの後を追った。

＊　＊　＊

チャンプは入り口前の薄汚れた自販機に寄りかかってコーヒーを飲んでいた。春特有のぬるまったい風に吹かれて、咥えている煙草の先端が赤く光っていた。吐かれた煙はすぐに霧散するけれど、チャンプはぼんやりとそれを懸命に目で追っていた。

話し掛けていいものか、そもそも近付いていいかどうかもわからず、ぼくは店の外に突っ立っていた。自動ドアが開いて、誰か出てくるのかと思ったけれど、どうやらぼくの立ち位置が悪かったようだった。慌てて場所を移す。あのポスターの前だった。

「大会、ねえ」
チャンプは独り言を話し始めた。
「どうでもいいんだよな、正直。誰より上手いとか、そういうの。興味がないんだよ。オレはあのゲームが好きだからやってる。学生の頃からずっと続けてる。だから、そこらへんのプレイヤーよりは上手くなった。敵がいない実感だってある」
でも、それはいいことなのか。チャンプは立ち上がって、煙草を踏み潰した。
「チャンプじゃねえよ、まったく。そうやって自分よりうまいやつを皆で祭り上げて、目標にする。そうしてるやつらはモチベが上がるだろうけど、オレは下がりっぱなしだっつの。根が負けず嫌いだからさ、プレッシャー掛かるんだよ」
ぼくは、とっくに炭酸のなくなったコーラで唇を湿らせた。
「そう、負けられねえんだよ。ここの常連とも、何回かメシ食いに行ったけど、やっぱり、なんだ、居心地がいいっつーか、楽しいんだよな、やっぱり。でもさ、ゲームで知り合った間柄だろ？　もしオレが大会に出て、負けたら、なんか、見損なわれそうじゃん。そしたら、もうこの店にも来れなくなっちまうだろうからな。それはさ、やっぱり嫌じゃん？」
コーラの缶がへこんだ。
「そんなことないと思います」
チャンプは煙草を吸い始めた。
「皆、チャンプを尊敬してるし、大好きだと思うから。もし明日、あのゲームがなくなっても、きっと皆来ると思うし、チャンプに会いたいって思うはずです」
だから大会に出てください。
その言葉が、でも喉元で踏みとどまった。
ぼくは気付いた。チャンプは、本当は寂しかったんじゃないかな。絶対的な存在としてじゃなく、ひとりの遊び仲間として、常連の皆と話したかったんじゃないかな。常連になりたかったんじゃないか

な。
　チャンプは笑った。
「バァカ。何真に受けてンだよ？」
「え・・・」
「冗談だよ、冗ー談。本当はさ、出張が入ってるから行けないんだよ。でもさ、正直に言うと、あいつら“仕事より大会ですよ！”とか馬鹿なこと言いそうだろ？　その手間を省かせてもらったんだよ。ホント、そんだけだから」
　嘘だ。
「いつからですか？」
「明日から」
「どこに行くんですか？」
「そんなの、言わなくてもいいだろ」
　チャンプはわざとらしく時計を見ると、行くか、と、小さくて強い独り言を言って帰り始めた。
　追おうと思ったとき、チャンプは振り向いて、お得意の苦笑いを見せてくれた。そのせいで、おやすみなさいを言うタイミングを逃してしまった。
　遠のいて小さくなっていく背中を、夜に飲まれてぼやけていく背中を、何も言えずに見送った。しばらく動けなかったけれど、閉店の時間になり、店の照明が落ちると、ぼくの足は自然と我が家へ向かっていた。
　次の日から、チャンプは店に来なくなってしまった。

＊　＊　＊

　大会は予定通り行われた。ネットの掲示板でもしばしば話題に上がる、有名なプレイヤーが無難に優勝した。
　まだこのゲームを遊んだことのない人々の間では好評だったけれど、既にやり込んでいるプレイヤーには眉をひそめてしまう内容だ

ったらしい。観戦に行った常連の話では、強いキャラクターばかりで、強い連携ばかり。蹂躙していく爽快感こそあったかもしれないけれど、面白みが全くなかったそうだ。その爽快感だって、もう何年もこの世界にいる人間は誰もが飽きてしまっているものだった。

当時、常連のやるせなさは爆発寸前まで高まった。もしチャンプが出場していれば、別の結果が見えていたことは明らかだったから。

何で来なかったんだろう。誰か知らないか。

「仕事で出張だそうです」

ぼくが意図的に口を滑らせた。チャンプのフォローになれば、と思って言った。

でも、それが事を余計にややこしくした。

常連の見解は

「仕事なら仕方ない」とフォローする人と

「びびって逃げ出した」と非難する人に分かれてしまった。その間で、またチャンプ批判が始まった。でも、双方とも、一番下にある気持ちは一致していて、それは

「なんで一言言ってくれなかったんだ」

という苛立ちに他ならなかった。しかし本人が不在なので、その不満は、誰も言いたくも聞きたくもないチャンプの悪口に発展してしまった。

以来、常連を見ることも少なくなった。集まり具合がまばらになってしまった。聞いた話では、他の店に流れてしまったり、また、このゲームで遊ぶことを止めてしまった人までいるそうだ。

悲しかった。たかがゲームで、と笑う人もいるかも知れない。でもぼくは、本当に、この店とあの時間が大好きだったんだ。

今日も未練がましく入店する。やっぱり、いつもの筐体には誰も座っていない。

右側に進んで百円を入れる。最近自信が付いてきたキャラクターでコンピュータ相手に練習開始。最初のうちは相手も弱いので、連続技の練習をする。

一人、二人と倒して三人目。そろそろ連続技が決まりにくくなってきたあたりで、背後に人の気配を感じた。誰だろう、と思い横目で見ると、懐かしい顔の人が咥え煙草でモニターを見ていた。
「さっきのとこは、違うな。もうワンセット繰り返してから叩き付けた方が、見栄えいいぞ」
まったく変わっていない、しばらく会っていないのに、その人は以前と何一つ変わらない様子でそう言った。
「お、お久しぶりです・・・」
名前を呼ぼうとして、呼べなかった。
気が付いてしまった。この人はもうチャンプではない。ただの、昔の常連なんだ。
でも、じゃあ何と呼べばいいんだろう。ぼくはこの時やっと、この人の苗字さえ知らないことに気が付いた。
「他の連中は？　駅前に移っちゃった？」
「ええ、ほとんど。あ、でも時々顔を出してくれますよ」
「ふうん」彼はコーヒーのプルタブを引いた。「小田は行かないのか？」
「ぼくは、やっぱりこの店がホーム・グラウンドですから」
彼は子供みたいに笑った。
「オレと一緒じゃん」
つられて笑うと、筐体から小気味良い効果音が聞こえた。何も操作していなかったから、ぼくのキャラクターがワンセット取られてしまっていた。もうワンセット取られたら、ゲームオーバーになってしまう。
「ったく、しょうがねえなあ」
言うと、チャンプは筐体の反対側へ向かった。面倒臭そうに頭を掻く仕草が、とてもわざとらしかった。
ぼくは必死に笑いを堪えていた。
また、彼と遊べる。
もう、チャンプだからと言って気合負けしたりしない。それに、

ぼくだって腕を上げた。思い上がりだけれど、今なら勝てそうな気さえ、する。でも、結果なんかどうでもよかった。全力で遊べれば、それでよかった。

やがて、反対側の筐体に硬貨が入る音がした。ぼくはレバーとボタンに手を沿え、格上のチャレンジャーを今か今かと待ちわびた。

#5：卵

「？　なんだこれ」

卵だった。エルエルサイズの卵よりちょっと大きめの、真っ白な卵が道路にくてんと転がっていた。初めはカラーボールか何かだと思ったくらいだ。

つい自転車を停めて、手に取ってまじまじと見てみたけれど、何の卵だかわからない。ニワトリのそれだとすれば異常なくらい大きいし、ダチョウのそれだとするならば病気を疑うしかないほど小さい。

表面をよく見てみる。人工物ではない証拠に、まだらな薄茶の斑点が浮かんでいた。わたしは文系ではないから、どう表現すればいいかわからないけれど、生命が形になろうとしてあがいた軌跡のような、いとおしさを感じる。

そう、この卵はたぶん生きている。もちろん表面は殻だし、何も付いていないんだけど、手にする前、道に無防備に転がっていたときから、ずっと見つめられていた気がしている。

＊　＊　＊

「なんだ、今井。まだそんなもん大事そうに眺めてンのか？」

本田部長は高そうなシャツをずらして首を掻いた。バイトもしていないのに、いつも質のいい服を着ている。人がごった返す大学の廊下でも一発で見つけられるほど、彼は目立つ。ちょっとしたアイドルのような存在なのだ。

「いやー、ひょっとしたらひょっこり孵化するかも知れないじゃないですか」

しねえよ。窓を開けて煙草を吸い始める部長。

「道に落っこちてた、得体の知れない卵だろ？　いっそ割ってみれ

ば？　それか、化学室で判別してもらうとか、さ」
彼は答えを急ぐ傾向がある。
「そんなあ。わたしのワクワクを取らないでくださいよ」
「成人迎えて何がワクワクだよ」
揃って苦笑。この時間に二人しかいないということは、きっと他のサークルメンバーは帰ってしまった。
まあ、それはそれで好都合。一気に距離を縮めるチャンスだ。
煙を吐いて部長が言った。
「ま、黒いノートじゃなくてよかったよな」
「ああ、この前映画やってたアレですか？」
「そ。イメージして名前書くと、そいつが死んじゃうやつ。原作は漫画なんだけどさ。ま、漫画の方が面白かったよ」
「へえ、そうなんですか。部長、持ってます？」
「集めたけど売っちまったよ」
ちぇ、貸してもらおうと思ったのに。
「そもそもさ、拾ったものに興味とか期待を持つってのが、そもそも間違いじゃねえ？」
窓の外に灰を捨てる。
「ええ、そうですかね？」
「そうだよ。楽しいことしたいなら映画とか本を観ればいいし、不確定要素の強い、しかも裏切られる確率の方がずっと高いことに時間を費やすのって、結構な無駄だと思うんだよね」
この発言には、“仏の今井”と呼ばれたわたしもムッとした。
「無駄なことなんてありませんよ。もしかしたら、この卵はわたしに拾われるのを待っていたかも知れないじゃないですか？」
「どんなメルヘンだよ・・・」
「でも、無いとは言い切れないはずです。そうやって、何でもあっさり見限ってると、楽しいこと見逃しちゃいますよ」
「はは、お呼びじゃねえや」
がらがら、と乱暴な音が鳴って、入り口が開いた。振り返ると、

今時の格好をした女生徒が強くあごを引いてわたしたちの様子を伺っていた。
「あ、本田さん。ちょっといいですか？」
空気など一切読まずそう言う女子も女子なら、煙草をガラス皿に捨ててお呼びに答える部長も部長だと思った。確かに区切りはよかったかもしれないけれど、迷惑だし不快だった。
ぴしゃん、と閉じた扉が、まるで部長の拒絶の意思を代弁しているように思えて泣きそうになった。
卵は水槽の中にある。もちろん水なんか入れていない。何かの包装に使われていた薄い発砲スチロールみたいなやつをちぎって鳥の巣に見立ててその真ん中に鎮座させてある。
お願いは聞いてくれないかも知れないけど、愚痴ぐらいは聞いてくれるもの。無駄なんかじゃない。人付き合いが苦手だから、こういう何も言わない「安全なもの」に逃げてるわけじゃない。こういうものが好きなんだ。
言い聞かせながら、ガラス越しに願い事。
―いつか、先輩と一緒になれますように
気が付いたら目を閉じていた。本気になった人間の性だと思う。ばつを悪くしながら目を開く。やだ、鼻から出た息でガラスが曇ってしまっていた。これはかなり恥ずかしい。
袖口で拭いていると、再び入り口が開いた。部長かと思ってドキリとしたけれど、冴えないオッサンだった。
「ああ、よかった。今井くん、論文のことで少し話があるんだけど、今ちょっといいかな？」
「あ、はい。え、ここで、ですか？」
「ううん、ボクの研究室で。ちょっと長くなるから」
軽い返事をして立ち上がる。
一対一は得意ではないけれど、仕方ない。そう、部長は唯一、わたしが気兼ねなく話せる相手なんだ。だから、気が付いたら好きになっていた。もちろん、こんなこと誰にも言ってない。言う相手も

いない。
でも、もしその気持ちが論文にありありと表現されていて、これからそこを突っ込まれたらどうしよう。
そんな妄想を頭を振って消しながら、わたしは教授の小さな背中に続いた。

＊　＊　＊

女生徒の執拗な告白を断り、本田は部室に戻った。
どいつもこいつも外見で好みを決める。第一印象の9割が外見で決まるとは言え、それが全てじゃあない。それに気が付かない異性を、彼はとことん嫌っていた。
また、突き刺さる視線が増えた。
そう思うと、本田の心はしぼんだ。
同時に、脳裏に今井の顔が浮かぶ。何故だかわからない。顔も好みではないし、考え方も正反対だ。にも関わらず、彼はこのところ彼女のことを思い出す時間が増えていた。すっかり枯れてしまったサークル活動にいやいやながらも顔を出すのは、そこに今井がいるからだと、彼はこっそり気が付いていた。
ことん。
卵が鳴った。土台が崩れたのか、太った生徒が廊下を通ったのかはわからない。しかし、戻ってから彼が一瞥した位置から、明らかに動いていた。
―卵、ねえ
ふたを外して、親指と人差し指で摘み上げる。
なるほど、不思議な魅力があるかもしれない。中に何が入っているんだろう。気になる気持ちもわかるかも知れない。
いや、それこそが卵の魅力なのかも知れない。
そう思い当たった瞬間、親指がチリっと痛んだ。
何だ、と思い指を離そうとした。しかし離れない。

見た。
親指が殻の内側に食い込んでいた。
吸われているのだ。
本田は声にならない悲鳴を上げた。しかしその間も、渦に絵の具を流したように、本田は卵に飲み込まれていく。
痛みはもうない。その代わり、まるごとミキサーにかけられているような強い不快感が彼を支配していた。
「誰か！」
そう言おうと思ったときには、彼はすっかり消えていた。両親に買ってもらったシャツも、昔の恋人に買ってもらった腕時計も、何もかもなくなっていた。
卵は元いた位置に軟着陸。満足そうに軽くのけぞると
「あ゛っ」
控えめに、げっぷをした。

＊　＊　＊

部室に戻るころには、太陽が傾いていた。机も壁も床も、全部オレンジに染まって、わたしの一番好きな姿に変わっていた。
論文は素直に褒められた。観点がよく、要点がよく書けている、と。他の教授に推薦するそうだ。好きなことでもないし、どちらかと言えばこなすつもりでやったことだけれど、認められるのは、やっぱり嬉しい。
部長はいない。煙草の匂いも薄い。きっと帰ってしまったんだ。それか、さっきの頭の軽そうな女と食事にでも行っちゃったんだろうな。
今日はプラスマイナスゼロ。
いや、少し赤字。
そうだ、と思い、卵を覗いた。わずかだけれど、体勢が変わっていることに気が付いた。

嘆くのは早い。わたしにはまだ、明日からもやることがある。意中の人を振り向かせたり、この卵の行く末を見届けたり。ほら、無駄なことなんかない。世の中は楽しいことだらけだ。

もしかしたらある中身を傷つけないように、そっと卵を手に取る。言葉にならない今日一日のいろいろな思いを込めて、わたしは卵に控えめのキスをした。

#6：手紙

亮平へ

こうして手紙を書くのも三度目ですね。今年も見事な桜が咲きました。川辺の道を覆いつくしそうな、見事な桜です。

きのう、私のクラスの生徒たちが卒業しました。笑いながら、泣きながら、桜並木をくぐって巣立っていきました。あの子たちの表情を見ていたら、一年間の苦労がどこかに飛んで行きました。それと、例年通り、『仰げば尊し』に、やられました。

「何度経験しても慣れないことは、弱点だと諦めてしまった方が、次の日にもっと強く、素晴らしくなれる」

覚えてますか。忘れてませんか。君の言葉です。

毎年必ずやってくる、卒業式と君の命日は、どうやら私の永遠で最大の弱点みたいです。

桜並木道を歩くと、最後に手を繋いで歩いた日を思い出します。私がメガホンを手にして映画を作ったら、ちっとも変わらず再現させる自信があります。

あの日を、あの瞬間を、私は何一つ忘れていませんよ。

顔に似合わず、ちょっと無骨なてのひら。

私が誕生日にプレゼントした香水の控えめな匂い。

細い目。

お日様できらめいた無精ひげ。

幸せそうに桜を見上げる横顔。

取りとめもなく交わした会話の全部。

君は教えてくれましたね。

「僕の実家では、山に積もった雪が風で舞って街に降って来る。本当に綺麗なんだ。一度見においでよ」

風花―かざはな―と言うんですよね。一緒に見上げることはでき

なかったけれど、君が不思議がった私に一生懸命説明してくれたから、そのときのイメージがちゃんとまぶたの裏に残ってますよ。きっと、こんな景色で、とても綺麗なんでしょうね。

そうなんです。この手紙を今、桜の　　下で書い　　ます。面倒くさがりの私がこ　　こ　をす　　んて、　　と君は信　　いでしょう。だから証拠に、便箋に花びらを挟んでおきます。

涙が落ちてしまいました。春の風なのに、なんだかとっても冷たいんです。風に舞う花びらが、まるで雪みたいに思えてきます。

毎年のように、手紙を煙にして送ります。ちゃんと、真っ直ぐ届くように、風の無い日に送りますね。

手紙を読んだら、返事なんかいらないですから、ちゃんと見ててください。来年こそは、きっと泣かずに春を迎えますから。

美穂より

追伸

君のお墓に桜の花びらがついていて、先を越された気がして、いろいろ思い出して、結局泣きました。

#7：約束の時間

―ごめん、出るのがおそくなっちゃってもう少しかかりそう

文面の最後には使い古された顔文字。両手をついて謝っているそれを見るたびに、もう帰ってしまおうか、と私の心がうずく。

日はすっかり落ちてしまった。はかなげな夕日も、もう消えてしまった。空は端から黒く染まっていき、やがて無邪気な星らが夜空を埋め尽くす。

こうなっていく景色を眺めたかったから、少し早めに待ち合わせ時間を設定したのに。

マフラーを巻きなおす。口元を隠すように。吐く息でちょっとはマシになったけど、今私が欲しいのはこの温もりじゃない。

周りは誰も彼も“つがい”。それはそうだ。ここはこの街の繁華街で、ここは駅前。しかも丘の上ときている。この街で最初に月明かりを浴びる、ろまんちっくな場所。おまけに聖夜だ。ひとりぼっちなのは私しかいない。どいつもこいつも幸せそうな顔しやがって。片っ端から殴りたくなるし、誰のそれも見たくなくなる。

こんなときは妄想する。相手が来て、こいつらに負けず劣らずの幸せに浸る自分を想像する。お前らが勝ち誇っていられるのも今のうちだけなんだぞ、って。ああ寂しい。

それにしても、こんないい女を待たせるなんて、業の深い人間もいるもんだ。神様がいて、もし私に同情してくれたなら、ぜひとも天罰のひとつやふたつ落としていただきたい。

携帯をいじっていると、それは震えた。これは私だけだろうか。受信するタイミングがなんとなくわかってしまう。

電話だと思って見たけれど、メールだった。それも、女友達からのノロケメールだった。あの馬鹿、空気読め。

電車がホームに入ってくる音がして、どこかに去る音がした。その間中、駅からあふれてくる人ごみに目をこらしたけれど、意中の

人が現れることはなかった。
溜息を打つ。マフラーに跳ね返って顔に戻る。鼻の頭が汗をかいた。
携帯を開いて、ホームページを見る。友人のブログはさすがに更新されていない。アイドルも今夜は忙しいようだ。ゲームでもやろうか、と思ったけれど、さすがに虚しくなって、やめた。
さっきのつまらないメールに返信でもしようか。いや、駄目だ。返事が返ってくるとは思えない。どうせ、あらかた楽しんで、相手がトイレに立ったりして、すっと暇にならないとメールのキャッチボールは続かない。それでも返信しようものなら、また、この孤独感がふくらむだけだ。
約束の時間から、かれこれ一時間が過ぎた。いい加減立ちっぱなしも疲れてきた。
・・・植え込みのレンガに座っちゃおうか。あそこには先客どもがいるから、あっちの、ずっと日陰だったところとか。
そっと触ってみると、氷の彫刻みたいだった。いや、実はそのものなんじゃないかな。とにかく、私が間違ってた。こんなとこに一瞬でも座ってしまったら、そのまま凍えてしまうに違いない。
「お待たせ！」
はっと振り返る。もちろん、満面の笑みで。不機嫌そうな表情なんか見せてしまったら、せっかくのデートが台無しになってしまうから。「今来たとこ」なんてバレバレの嘘はつかないけど、それを帳消しにしてしまうくらいの幸せが―
「ううん、今来たところだよ」
視線の先には、新しいカップルが誕生していた。仲睦まじく腕なんか組んじゃって、女が男の肩に頬ずりしている。
―死んじまえ！！
念を送っていると、肩を叩かれた。
「ちょっと、顔、恐いよ」
「・・・あ！」

「いや、遅れたのは謝るけど、せっかくだから楽しもうよ。笑顔エガオ」
言うと、ユリは私のほっぺを無理矢理引っ張り上げて笑わせた。
「やだ、ちょっとチカ、何涙目になってんのよ？」
「いや、その、風が、ね。ほら、冷たかったから」
「ふうん？　泣くほど待ってたのかと思った」
「そ・・・んな・・・」
「こと、ないよねー。せっかくのクリスマスなのに女二人でご飯だもんねー。あ、そっちで泣いてたのか」
彼女は朗らかに笑った。
「ま、いっか。さ、行こう。遅れた分を取り返さないと、ね」
彼女は私の手を握って、光り輝く繁華街へ向けて歩き始めた。
―これこれ。この温かさだよ

#8：翼をください

「高校に進学してから2年間、ずっといじめを受けてきました。
上履きを捨てるとかオーソドックスなものから、かばんに毛虫を詰め込むとか突飛なものまで。本当にたくさん、それは飽きるほど受け続けてきました。
友人と呼べる人はいません。仲のよかった人は家庭の事情や夢のせいで別の学校に進学しました。新しい友達を作る前に、私はクラス全員のストレス発散の的になってしまいましたから」
「それはまた、大変というか、災難というか」
「何度も死のうと思いました。ほら、リストカットの痕がこんなに。まだ治っていないものもあります。少し力めば、開いて肉が覗いて血が出てきますよ。見ますか？」
「いえ・・・遠慮しておきます」
「それでも、とうとう何もできなくて、それでも辛くて悔しくて、私はいよいよ逃げることにしたんです。今度は本当に。だから飛び降りることにしたんです。私の家は一軒家だから、学校の屋上から。私の教室の窓から見える場所から、頭から真っ逆さまに」
「あてつけ、ということですね」
「そのとき、ああ、そうですね。見なければよかったのに、私はつい、あごを上げてしまったんです。
びっくりしました。こんなことってあるんですね。
雲ひとつ無い、見事な晴天だったんです」
「・・・」
「空は私を少しだけ前向きにしました。まだ、できることをやってない。ううん、そこで私はやっと、やりたいことを見つけたんです」
「それが、先ほどのお話ですね。こう言っては失礼ですが、思春期の女性が抱く希望としては、酷く陳腐な部類に入ります。この国を見渡しても、それを本気で叶えようとしている人はいないでしょう。

そう、常識を備えていない子供以外は。
つまり、“空を飛びたい”と」
「インターネットってすごいですね。その気になれば、なんでも調べられる。近くに住んでいる、パソコンに詳しいお兄さんに“一度抱かれてあげた”ら、博士のことを見つけて、アポイントまで取ってくれましたよ」
「そこまでして・・・」
「そんな顔なさらないでください。自分で決めたことですから。
お兄さんの調べた結果はこうです。
生物学の草分け的存在の博士が、人体に羽を生やす研究を進めている。もちろん秘密裏に。でもそれは、完成しつつあるものだ。間違いありませんよね。いえ、返事は結構です。もう、わかってますから。
お願いします。私に翼をください。私に、新しい世界をください。お願いします」
「・・・痛みを伴いますよ?」
「大丈夫です。そういうのにはもう、慣れてます」
「元には戻れませんよ?」
「こんなものには未練もありません」
「・・・どうやら、意志はかなり固いようだ。
よろしい。では、この薬を飲んでください。すぐに意識はなくなります。ですが目覚めれば、あなたは空を飛ぶことができるようになっています」
「・・・」
「恐いですか? 無理もない。しかし、こちらも腹をくくりました。不安定な精神状態では術後の機能に支障が生じてしまう。走馬灯でも見ながら、ゆっくり羽休めするといいですよ」

＊　＊　＊

「もしもし。どうですか。ぼくの声が聞こえますか。
・・・よろしい。ぼくの姿が見えますか。はい。これは何本ですか。結構。
さあ、体を起こしてみてください」
「・・・ああ、博士、わかります。よおく、わかります。
まるで、背中にもう一対手が生えた様な感覚なんですね。それに、想像していたよりずっと軽い。これなら、今すぐにでも空に飛び出せそうです！」
「大成功でしたからね。そう言うだろうと思って、屋上であなたを起こした。どうですか。皮肉なものですね、雲ひとつ無い晴天だ」
「本当だ。あんなに憎たらしかった空が、今は恋人みたいに思えます！」
「おめでとう。
あなたは生まれ変わった。これからは、それで、自分の思うとおりの道を進めばよろしい」
「はい。ありがとうございました」
「そうそう、鏡を用意しておきましたよ。新しいあなたを、しっかりと見ておくといい。これからずっと、付き合うものですからね」
「まあ、ごていねいに・・・・・」
「どうですか？　美しいでしょう？」
「・・嫌」
「日の光に透け、浮かび上がる金色の筋。羽ばたくたびに鳴る付け根。身の丈を軽く越えてしまうほどの、それもここまで生々しい羽を作り、人体に埋め込むまでに数年の時を要しました。あなたは、この羽を持った人間第一号だ。ぼくとしても、あなたをとても誇りに思いますよ」
「嫌です、博士」

「あ、タバコを失礼しますよ。いい仕事をしたあとは、これがまた格別に美味い」

「嫌！　嫌です！　博士、これ抜いてください！　嫌！　こんなの嫌！　絶対に嫌です！　博士！」

「黙りなさい。ぼくの可愛いゼミ生が起きてしまいます。
・・・ああ、それとひとつ、忠告を。ニュース、見ました？　先日、隣国が緊急事態に対応して非常戦線を張ったそうです。下手な空域を飛んでしまったら、そのまま撃墜されてしまいますよ」

「・・・そ・・・ん、な・・・。こんなのじゃないのに。もっと、もっときれいなもののはずだったのに・・・！」

「・・・ああ。神話の天使よろしく、鳥の“羽根”を想像していましたか？　ならば、気の毒としか言い様がない。ぼくがメインで研究しているものは昆虫でしてね。まあ、ハッキングされたデータベースには無い情報なので、知らないのは当然ですけれど。

　本当に好きなんですよ、昆虫。あの、目にも止まらない速さで動く羽に、幼少の頃より心を奪われていたんですよ。

　それに、余談ですが、鳥類の羽根で飛ぶのなら、その数倍の体積と重量が必要になる。体の小さい、あなたのような子供には、到底扱えませんよ。

　何より、あなたに羽根は似合わない」

「・・・はあ？　何言ってんだ、テメエ！　この、クソハゲ！！」

「・・・そうそう、この際だから言ってしまいましょう。

ぼくは、死にたがりが大嫌いでしてね。リストカットなんてストレスの発散方法すら見つけられないグズの行いだと思うし、その傷跡を誇らしそうに見せている様子なんかは、なんというか、虫唾が走りましたね。なんだったんですか、あれは？　私はこんなに傷ついている。だからこれ以上言わなくても優しくして下さいね、ってことですか？

同じ話を、以前他の知人にもしたことがありましてね。そしたらソイツ、何て言ったと思います？

“あいつらは逃げる為に死んだんじゃない”なんて、真顔で言うんですよ。思わず笑っちゃいましてね。身内じゃあ温厚だと評判のぼくですが、そのときばかりは声を張って言ってしまいましたね。なら立ち向かえ、何事にも死ぬ気で挑め。誰も、自分の理想どおりに生きているわけじゃない。やれることをやりつくしても、欲求の半分も満たせない人間だっている。それでも、なんとか必死に生きているんですよ、って。そしたらそいつ、黙りこくって、まるで今にも死にそうな顔をしていました。それきり、そいつの顔は見ていません。

話が逸れてしまいました。これから、新しい人生を歩むあなたに、人生の先輩からアドバイスしましょう。

ヒトには立場、というものがあります。望もうと、望むまいと。そしてそこから移動したり抜け出したりするのは、いつだってその本人次第なのですよ。

若くて幼い自殺志願者さん、あなたには圧倒的に経験が足りない。知識が足りない。度胸が足りない。勇気が足りない。友が足りない。自己愛が足りない。他人との結びつきが足りない。そのくせ、理想だけが誰よりも高い。

だから、そういう後悔を味わうことになる。きちんとした下調べもせず、ミシン糸のような希望の欠片にぶらさがる。その癖、糸が切れて自分が落ちたら、責任はすべて糸にあると胸を張る。馬鹿な自分ではなく、それを支えられなかったこいつが悪いんだ、とね。

ありのままでいられないから死を選ぶ？
そんな人生は茶番だ。そう思いませんか？」
「うるさい！　うるさい！！」
「やれやれ、失礼なヒトだ。
ぼくはあなたの希望に応えたんですよ？
もう、あなたは飛べるんですよ？
なのに、ちょっと自分の希望と食い違っていたからって、そんな失礼な罵声を？
あなた、ひょっとしたら、なんで自分がこんな立場にいるのか、考えたことすらないんじゃないんですか？」

＊　＊　＊

少女は頭を抱えて、文字にできない言葉を辺りに撒き散らしながら、屋上から飛び出した。
背中に生まれた慣れない感覚に神経を集中させ、なんとか羽ばたき、木々の枝を圧し折りながらなんとか高度を維持したが、やがて目の前に現れた電波塔を避けきれず、肩から激突。脱臼と骨折で彼女の意識にもやが掛かると、そのまま駐車場に落下、首を複雑骨折、へどろのような脳漿をぶちまけた。
男はその一部始終を双眼鏡でずっと眺めていた。全てを見届けると、手元の設計図に目をやった。
やはり、この数値では方向転換が難しくなる。
すぐにひらめき、ペンで数値を消し、新しい数値を書き込む。
その紙は、もうすっかり設計図としての役目を果たしていなかった。あちこちに書き込まれた数値には、古いのから新しいのまで、ほとんどと言ってもいいほど書き直されていたのだ。
彼ははたと思い立った。
見やすい設計図に書き直そう。何度でもやり直せばいい、と。

#9：てのひらを見つめる

オカルトなんて大嫌いだ。

心霊現象の特集なんて観たこともないし、心霊写真も嘘っぱちだと笑い飛ばしていた。神社にお参り、なんて暇人のすることだと思うし、お守りなんて邪魔なだけだ。

祈りも願いも、自分でなんとかするしかない。都合のいい願い事を聞いてくれる神様なんかいない。仮にいたとしても、そいつは無慈悲なもんだ。おまけに気まぐれだからどうにもできない。なのにそれを信仰して重んじるなんて、もう、馬鹿としか言えない。悪い行いが巡って自分にやってくる？　いい行いをしないと死んでから天国に行けない？　腹がよじれてしまう。

でも、それも、つい昨日までの話。今なら、オレはそういうのを全部信じられると思うんだ。

＊　＊　＊

あまりの寒さで目を覚ました。ちゃんと、アンカを仕込んで、頭まで布団を被って眠りについたはずなのに、この気温はなんだ？

見覚えのある光景だ。左に古ぼけたオレの家、右に親父が暇つぶしにいじっている庭。季節がら、すべて雪を被っている。

庭だと？　オレの部屋は二階だ。

まさか、誰かがオレを窓から突き落としたのか。いや、オレの体重は１００キロを越えている。自慢じゃないけれど、そんなことをできる人間はこの村にはいない。

とにかく、動こう。ここにいては凍えてしまう。

立ち上がれなかった。

いや、手足は伸びるんだけど、腰が伸びない。

それに、首が苦しい。なんとか家に向かおうと足を出すと、きゅ

っと締め付けられる。数歩動くのが限界だ。
オレはパニックに陥った。置かれている状況がわからない。家には入れない。雪に触れている部分がだんだん痛くなってきた。
そして、追い討ちが入る。
家から誰か出てきた。目がかすんですぐにはわからなかった。
そいつはオレに向かってのっしのっしと歩いてきた。
そいつはもっちゃりした声で言った。
「おはよう、コジロウ」
そいつはオレだった。
分厚い眼鏡を掛けて、えりの伸びたトレーナーを着て、自分の庭なのに長靴を履いていた。手には薄汚い竹箒が握られている。
それでやっと、オレは事態を把握した。オレとコジロウの中身が、入れ替わったんだ。
オレ、いや、コジロウは竹箒を反対に持って、その辺の雪を叩いた。本能的に痛そうな音が鳴って、体が思わずびくついた。
思い当たる節はいくつもあった。オレは学校でムカつくことがあると、決まってコジロウに当たっていた。
餌に釘を混ぜてみたり、
牛乳に砂を入れてみたり、
竹箒で体や頭を叩いてみたり。
「おいおい、もう17になるんだろ？　子犬みたいに震えてどうするよ？」
コジロウは箒をしっかりと握ったまま、膝を曲げ、オレに視線を合わせた。

＊　＊　＊

寒いだろ。前まではそれでもなんとかなってたんだぜ。おふくろさんが毛布を置いておいてくれたからな。でもそれも、アンタがこの前燃やしちまったよな。切なかったぜ。

どうしてこうなったかわからない、って顔してるな。いやさ、自分の顔だからわかるんだよ。
オレたちはな、ときどき妙なヤツが生まれてくるんだ。声帯がちょっと変わってたり、頑張り屋だったりなんだが、オレの場合は、遠くの仲間とテレパシーで喋れちゃうんだなあ、これが。
でよお、この村の他のヤツとか、海や国境の向こうのヤツとかと話してて思ったのよ。なんでオレは、こんなに不遇なんだろう、ってな。理不尽だと思ってるだろ？　オレは何もしちゃあいない。あんまり吠えないし、餌をねだったりもしなかったはずだ。人間に噛み付いたこともない。
なのに、なんでコイツはこんなに酷く、辛く当たるんだろう。
ずっと思ってたよ。
ま、わからなくもないわ。お前、学校でいじめられてんだろ？
きっと、この重たい体が原因だな。あと、理不尽な行動な。
まあ、そういうののはけ口が見つかっただけでも、偉いと思うよ、実際な。何にも、とはいかねえけど、誰にも迷惑かけない方法を見つけたお前は賢いよ。ガキだけどな。
・・・おうおう、わかってない顔だな。
実はな、お前に頼みがあるんだよ。別におふくろさんでもおやじさんでもよかったんだけどよ、今、オレにわざわざ会いに来てくれるの、お前だけだからさ。
なんつーの、愛？
ん、なんか、くすぐったい単語だな。優しさ。うん、こっちの方がいいな。それをさ、欲しいんだよ。なんかさ、よそのヤツらがあんまり自慢げに話すもんだからさ、ちょっと興味が沸いたんだよな。
そういうのってさ、オレらには無いんだよ。子孫を残すためにメスを見つけるし、挿れる。前足で体に引き付ける、ってのも、なんか、うらやましいんだよな。
バアカ、いきなりそんなもん求めちゃあいねえよ。こうやってさ、頭を撫でてくれるだけでもいい。いや、それがいいな。オレも恥ず

かしいしさ。
わかってるよ、お前がオレのことを嫌ってないことくらい。お前、体とか手足はバシバシ叩いてたけど、目はおろか顔には一発も入れなかったもんな。
ん、安心したわ。お前の手、こういう動きできるじゃん。
悪ィな、これだけ確かめたかったんだわ。んじゃ、邪魔したな。

＊　＊　＊

重い布団をどかして、起きる。窓の外はお粗末な銀世界だった。
手のひらを見ると、細くて茶色い毛が付いていた。
下に降り、居間を横切る。新聞をだらだら読んでいるおやじに軽くおはようと言う。
廊下にぽつりと置いてある餌箱からドックフードを掬い、外へ。
思わず肩を縮めてしまうほど寒かった。間違いなく氷点下だろう。
コジロウは首を動かしてオレを見つけると、さっと起き上がり、落ち着きのない「おすわり」をした。
オレは器に餌を入れ、冷たい廊下に腰を降ろして、餌にがっつくコジロウをぼうっと眺めていた。
何度も、何度も、手を伸ばそうとしては諦めた。
きっともう、二度と言葉は通じない。それはもう、悔やんでもしょうがない。
わかってはいる。わかっちゃあいるんだけどさ。
唇を噛んで、寝巻きのズボンを握り締めて、太ももを叩いた。
とうとうコジロウが餌を食べ終えた。髪の毛を掻きむしるオレを見て、コジロウは口周りを一気に舐めてから、音が鳴るほど首を傾げた。

#10：五月の狼

更衣室は薄い汗の匂いがした。私以外誰もいないから照明は付けない。もう一年もここで着替えている。手探りでだって、どこが何かくらい判る。例えば、これがアイツの使っているロッカーに違いない、ってことくらい。

小西は私より半年も遅れてアルバイトを始めたのに、奥さん方に評判の笑顔と、センスのある冗談のおかげで一躍人気者になっていた。正直、私も嫌いじゃない。

ただ、気に入らない。上っ面だけで渡っていけるほど、世の中は甘くない。それを知ってか知らずか、どちらにせよ、誰かが教えてやる必要がある。

「今日はちょっと、欲しいものがあるんで、財布に五万ほど入ってるんですよ」

出勤前の、小西と店長の会話から抜粋。

化けの皮を剥いでやる。ていねいに付けられた仮面を無理矢理外してやる。

十九年生きてきて、悪いことをした自覚なんか一つもない私だから、ロッカーを開けるときにはもう心臓が暴走していた。それでも、手際よくやらないと誰かが来てしまうかもしれない。

黒いトートバッグの上に、無造作に置かれた長財布。

手に取ってみると、ずっしりと重かった。紙幣のせいじゃない。目の大きな女の子がプリントされた、気持ち悪いカードがぎっしり詰まっているせいだ。でも、それだけだろうか。よくわからない。

ぱかりと開いて、茶色い紙幣を三枚抜く。全部じゃあ酷すぎる。ひとつじゃ気が付かないかも知れない。そう、私はすっかりゾクゾクしていた。

＊　＊　＊

店長のお疲れ様でした、に続いて、私と小西が同時に礼をする。間がいいのか悪いのか、二人とも１８時で退勤だった。
それぞれの性別の更衣室に入り、出てくる。そこはもう事務所で休憩所だ。社風で、このまま流れで帰ってしまうバイトは少ない。サビが見え始めたパイプ椅子に座って、タバコを吸ったり雑談をしてから帰る。
没収した紙幣はカバンの一番下にしまった化粧ポーチの中のファンデーションのふたの裏に隠した。私は自他共に認める貧乏フリーターだから、あんな大金を財布に入れておくわけにはいかない。
「小西、小西ぃ」
「はい？」
同い年なのに、彼は私にずっと敬語を使い続けている。先輩だから、じゃなくて、彼のライフスタイルなのだろうか。
「今日、オカネモチなんでしょ？　ジュース、おごってよ」
彼はにっこりと微笑んだ。ええ、いいですよ。
紅茶を注文して、連絡ノートを見るフリをして口元を隠した。軽くなったことを自覚して、薄くなった紙幣の束を見たら、彼はどんな顔をするんだろう。敵を作らない笑顔の仮面、その下の表情を、私は今か今かと心待ちにしていた。
「っと、小銭がないや」
おあつらえだ。
小西は紙幣のゾーンを覗き込んだ。
―気付いたろう
彼はすっと千円札を出して自販機に飲ませ、私の紅茶を買ってから自分の分のお茶を買った。両手にひとつずつ持ってテーブルに戻ってくる。
「どうぞ」
いつもの笑みだ。
「お・・・。あ、ありがと」

動揺してしまっては台無しだ。私はすっと受け取り、紅茶の香りを少し楽しんでから、異常に乾いた喉に流し込んだ。
―マジですか・・・
想像して欲しい。五万入っている財布に二万しかない。千円札を取り出す動作をしたとき、このことに気が付かない人間がいるだろうか。
いや、いないとは言い切れない。もっともこれは可能性の話だけれど、実家がとても裕福で、お金の意味と価値を知らない、とか。でもそれは、今朝の店長との会話と相反する。では、本当に間が抜けている、というのはどうだろうか。自分のものがなくなったことに気が付かない人間は、実は結構いる。
ならば、自覚させてやろうじゃないか。もう、徹底的に盗みきってやろうじゃないか。
「ねえ」
「はい」
「このあと、暇？」
「ええ、まあ」
「ご飯食べに行かない？」
「いいですよ。実は、僕もそう思ってました」

＊　＊　＊

三皿目のミノに手を伸ばしてから、網に乗せるまで、ある違和感を感じていた。
小西は、あの金で何か欲しいものがあったはずだ。それを買いに行く、と言っていたはずだ。なのに何故か、私とこうして焼肉を食べている。それも、いい食べっぷりだ。遠慮なし、よりも手当たり次第、がしっくりくる。
もしかしたら、を考えて、やめた。まだ何もわからないじゃないか。自分から進んで不安になる必要はない。

「田中さん」
活気付いてきた店内でもはっきり聞こえる、彼の声。
「ん？」
「何か飲みますか？」
まだオーダーする気かよ。フリーターのディナーのレベルじゃない。飲むけど。
「んじゃ、コーラお願い」
「カクテルとかでもいいですけど？」
「ん？」
お酒は大好きだ。でも今日は酔えない。
「ううん、今日は止めとくわ」
「大丈夫ですよ、おごりますから」
びくつきそうな体と心を必死に抑える。もちろん、表情をそのままにしておくことも忘れずに。
「悪いよ。割り勘にしよ」
小西は笑って濁した。
私は残りの水を流し込む。
さて。動かなくてはならない。これでは何をしに来たのかわからない。
でも、どうに動こうか。へたに金額のことを話しては、彼の胸に疑いが芽吹いてしまう。買いたいものに触れるのがベストだけれど、店長との会話を聞いていた、という事実がやはり危なっかしい。しかしそこに触れるのが一番手っ取り早い。
「小西ってさ、休みの日は何をしてるの？」
彼は少し驚いた。
「知らないんでしたっけ？」
「何を？」
「僕、漫画家志望なんですよ」
「へえ」
驚かない。きっと、イマドキの漫画家志望なのだろう。あの財布

の中のカードのデザインが脳裏でスライドショーを始めていた。
「早番の人は皆さん知ってますよ。店長が喋っちゃったんで。なので執筆とか勉強とか、ネタ探しとか」
を、できたらいいんですけど、と言い、カルビを口に運ぶ。
「結局、遊んじゃいますね。ゲームとか漫画ばっかり買っちゃいます。あとは、好きな声優さんのＣＤとか。本当に、お金のかかる趣味ですよ。今度出るＤＶＤボックスなんか五万円もするんですよ」
来た。
これだ。
「へえ、そうなんだ。そういう風には全然見えないね」
自然と満面の笑みが出る。
なるほど、なるほど。おおよその察しのとおり、あの大金は趣味のための大事な資金だったのだ。それがバイト先でなくなった。彼は慌てふためくだろう。誰彼構わず疑うだろう。食って掛かるかも知れない。そんな彼を是非見てみたい。早く明日にならないかな。
しかし期せずして、この食事会は第二幕を迎える。
「でも、また今度にしようと思うんです」
彼の台詞も、にっこりとした表情も、全て想定外のものだった。
「なんで？」
「田中さんとご飯が食べられましたから」
胸がえずいた。
「何、ソレ・・・」
「ずっと思っていたんです。いつか、一緒に食事に行けたら、楽しいだろうなあ、って」
さて、どういうことか。
いや、今のは何だ？
え、まさか、告白？
―落ち着け
うろたえては駄目だ。ぼろが出る。平常心、平常心。
しかし、彼も間が悪い。何もこんなタイミングで言ってこなくて

もいいのに。ちょうど、前の彼氏と別れて二ヶ月。いい感じに、人肌恋しくなってきているところだ。
顔だけなら、小西はタイプだ。でも、私には中身がわからない。それも込みで査定している。
―落ち着け
待って。
おかしい。
私は彼に優しくしたことなんかないし、そもそも仕事を一緒にしたことも少ない。プライベートで一緒になったのもコレが初めてだし、そもそも下の名前すら知らない。
なのに、告白？
いや、そうじゃないとしても、違和感のある一言だ。一目惚れなんて私は信じてない。
もしかしたら、彼は全部見透かしているんじゃないのかな。金を盗まれたことも、犯人が私だということも。全部知った上で、彼は私を泳がせて、楽しんでいるんじゃないのかな。
だとしたら最悪だ。とんだお笑い種だ。恥ずかしくて生きて行けない。いや、もう死にたい。
―だが
でも、まだそうだと決まったわけじゃない。彼が本当に私のことを好いてくれているのかも知れない。
悪人だとばれないように、善人でいなくてはならない。
これが、いわゆる業というものだ。
「田中さんは、将来どうなりたい、とかあるんですか？」
「あるよ」
即答して、体を机に乗り出した。
「美容師になりたいんだ。夜間だけど、専門学校も行ってるよ。この前初めて生きた髪の毛を切ったんだ。モデルの人も大満足してくれてたんだよ」
「へえ、すごいですね」

馬ァ鹿、ハサミなんか百円均一のしか持ったことがない。
「じゃあ、いずれは自分のお店を？」
「もう土地も買ってあるんだよ、実は。親に頼んで手入れしてもらってるんだ。高校のときの後輩がガテン系の仕事のお偉いさんやってるから、資金が溜まったらソイツに頼んで店を建ててもらう。デザインも決まってるんだよ。今度見せてあげるね」
親はさっさと離婚してしまったし、もう何年も母の顔を見ていない。
「ありがとうございます。そしたら、そこを舞台に漫画を描きますよ」
二人して、笑う。彼は楽しいのかも知れないけど、私は馬鹿らしくて笑った。
「僕も実は、まったく宛てがないわけじゃないんですよ」
網の上で真っ黒になった野菜を空いた皿にどけながら、彼は話を続けた。
「先日、某出版社の編集さんに送ったネームがとても好評で、もしかしたら近々デビューしちゃうかも知れません。まあ、いきなり週刊っていうのは大変だと思いますけど、ずっと追いかけてた夢ですから、叶えたいですね」
「へえ。有名どころ？」
「絶対読んだことあるでしょうし、本の置いてあるお店なら間違いなく売っていますよ」
「本のタイトルは？」
「それは秘密です。言ったら、チェックしちゃうでしょう？　それはちょっと、味気ないじゃないですか」
本当に？　を飲み込む。
十中八九、嘘に違いない。そんな大ニュースなら、きっと他のバイトさんにも話している。となれば、あの噂好きの主婦チームが黙っているはずがない。必然、私の耳にも一度は入っていなくてはいけない情報なのだ。

これで断言できる。彼も嘘をついている。でも、それに気が付いてしまってはいけない。彼も私の嘘に気が付いているだろうから。先に本音を言ったほうが負けなのだ。

少し間が開いた。こちらの出方を伺っているのだろうか。と思い、ちらりと見ると、視線がぶつかった。また笑う。静電気が飛びそうな緊張がテーブルを占領している。

肌がちりちりする。なんという、心地よい感覚だろう。こんなに真面目に生きたこと、いままでなかった。

田中さん。

小西がテーブルに肘をついて、私の顔をじっと見た。その表情からは、あのいけ好かない笑みが失われていた。

「僕は、初めて田中さんに会った日から、ずっとあなたのことが好きでした。

綺麗な髪」色の抜き過ぎで痛みが酷い。

「大きな目」本気で整形を考えたことがあるほどのコンプレックス。

「魅力的な声」今日は仕事で張ったので枯れている。

「服装のセンス」黒いスウェットだ。

「香水も本当に似合っていて」付けてない。

「素敵だなあ、と思っていました。よろしかったら、是非、僕と」

つばを飲んだ。

「ケッコンヲゼンテイニツキアッテクダサイ」

感心した。どれほど苦労して、そこまでの科白を吐いたのだろう。

もしかしたら、これは、本当に好きなのか？

いやいや、油断してはいけない。相手は私の人生最強の大嘘つきだ。

私は彼の手を両手で握って、できるだけ優しく微笑んだ。

「アリガトウ。ワタシモアイシテイルワ」

＊　＊　＊

肌が熱くなっていた。初夏の窓際にずっと座っていたのだから、仕方がない。それにしても、うたた寝なんていつぶりだろう。本当に気持ちよかった。懐かしい夢も見れたし、言うことがない。

「起きましたか」

彼はシンプルな布団にくるまったまま、私に顔を向けていた。

あのままだらだらと、嘘だらけで付き合った私たちは、やがて結婚して、私はありがちな主婦になった。

結局、彼は漫画家なんか目指していなかった。やがて普通の会社の歯車として働いた。私も美容師になんかならなかった。でも、お互い何も言わない。そうやって私たちは生活してきて、おじいちゃんとおばあちゃんになってしまった。子供はいない。一度も抱いてくれなかったし、求めなかったから。

「全然。ずっと起きていたわよ」

「そうですか」

「あなたは、もう少し休んだほうがいいんじゃない？」

かも、知れませんね。彼は寝返りの代わりに溜息をうった。

「実はね、僕は飛べるんですよ」

「空を？」

「空を。どこまでも」

「素敵ね」

「ええ、本当に」

風がぬるい。

「ああ、寝すぎたかな」

「おなかすきましたね。何か出前でも取りましょうか？」

「いや、君が好きなものを好きなときに好きなだけ食べなさい。お小遣いは渡してあるでしょう」

「はい、わかりました」

ふう、と、重い息。

彼は嘘ばかり言うけれど、医者は嘘を言わない。彼の体を蝕む病は、もう止められないらしい。そして彼の体も、それに耐えられる

状況では、とてもないそうだ。
彼も私も、なんとなくわかっている。でも彼は笑って跳んで見せたし、私も笑って彼にお茶を出した。
もしかしたら、彼は私の知らないどこかで、弱音を吐いたり、泣いていたのかも知れない。そう思った時期があった。今ではそんなこと、夢にも思わない。彼が嘘を言うたびに、裏にある本心を、数年前にやっと見つけることができたから。そうなれたから。
「実はね」
声が細い。
―いよいよか
私は彼の傍に寄り添い、くっと手を握った。
「僕は君にひとつだけ、本当のことを言ったことがあるんだよ」
胸が詰まって、気が遠くなった。
何で？　何でこんなときに、そんなことを言うの？　彼の間の悪さは、とうとう死ぬまで治らなかったのだ。
私への、罪滅ぼしだろうか。もしくは、自分の業から逃げる為の告白？　どっちもいらないのに。私はあなたと会えただけで充分なのに。それに―
「ええ、わかってますよ。当てましょうか？」
「やめてください。恥ずかしい」
「実はね、私もなんですよ。ひとつだけ、本当のことを・・・？」
彼の体が、静かに痙攣を始めた。ごぼごぼと彼の喉から血が溢れ、純白のシーツをこれでもかと汚した。それにつれて、彼の顔から血の気が引いていき、土気色に染まりきろうとしたその時
「楽しかったよ。ありがとう」
力が消えた。
彼は、どれほど力を入れて生き抜いたのだろう。
私に嘘をつき続けて、時には隠そうともごまかそうとも思えないへたなそれでも、間違いなく散りばめて。
いつしか、それが二人の自然になったとき、あなたは教えてくれ

たんですよ。
続けた嘘は真実になる、って。
ああ。
幸太。
幸太。
幸太。
私はあなたに、何も本当のことを言ってあげられませんでしたね。
ごめんなさい。
ごめんなさい。
ああ。
「大好きですよ、あなた」
手を握ると、そこに涙が零れた。
強い風が吹いた。
庭のいちょうの葉が、駆け抜けるように鳴いていた。

#11：駅

いまだに腕時計がデジタルなのは、きっと私くらいなのだろう。最近では新入社員も、聞き覚えのあるメーカーの腕時計を巻いているし、課長補佐ともなれば装飾品ひとつにも気を配るのが当然だ。しかし私はデジタル時計を愛用している。何故か。簡単なことだ。見間違えがないからだ。

仕事柄、昼夜逆転の生活になることもあるし、お日様を拝めない事だってめずらしくない。そんな状況でも、正確な時間がわからなくては、登りつめることなどできはしない。お洒落に気を遣っている暇など、企業戦士にはないのだ。それをわかっていない連中が多すぎる。

実際、歯痒い思いをしている。どいつもこいつも、文屋としての自覚が足りない。肌荒れを、抜け毛を、体調を気にして、いいものが書けると思っているのだ。もちろん、体調不良やローテンションでいいものが書けるとは思えない。しかしベストコンディションを維持していたままでは、辿り着けない境地があることを知らないのだ。

それを教えるのも年長者と先輩の務めかも知れない。でも私は優しくない。こうして始発に乗り込み、仕事に勤しむ姿を見せ付けることによって、学び取ってもらう他、ない。

＊

思わず首が動きそうになるのを抑える。こんなことなら、一番お気に入りのミュージックリストなんか準備してこなければよかった。でも、もう遅い。家までは二十分かかるし、なによりもうすぐ電車が来る。

例え満員電車に乗っても隣にひとつの音も漏れないような音量に

してある。よくいるだろ？　シャカシャカうるさい音を立てて、自分の世界に浸っているアホが。オレはあんな連中と一緒に見られるのはごめんだ。たしかに、今のオレは赤いシャツに黒いレザーズボン、ごてごてしたベルトのバックルとシルバーアクセサリー、髪の色も金髪だし、不必要なピアスを顔中にぶらさげている。でもこれはオシャレではない。カモフラージュなんだ。

秘密はこの、ギターケースにある。この格好でこの持ち物だ。どこぞの大学生がライブに行くようにしか見えない。でも、実は違う。このケースの中には、とある巨大国家の最先端の技術を駆使した、殺人銃がしまってある。サツジンジュウ、なんて大げさな、と思うだろう。でも事実なんだ。壁でも障害物でも、動物を撃つために作られたわけでもない。今オレが背中に背負っているこれは、正真正銘、人間を殺すためだけにつくられたものなんだそうだ。

そう。オレは運び屋。郊外の辺鄙な駅から出る始発に乗り、港まで送り届けるのがオレの仕事だ。だから辺りに気にされないような格好をしている。あの、すみっこにいる、さっきから独り言をぶつぶつ並べている危なそうなサラリーマンのように、目立ってはいけない。

この格好の素晴らしいところは、長いものを持っていてもごまかせることと、誰も積極的に目を合わせようとしないことだ。

・・・絶対に、とはいえない。先ほどから、母親に手を持たれている男の子がオレのことを凝視している。まあ、あんな子供を気にする必要はないんだけど、緊張をなくしてしまったら、そのままオレの命までなくなってしまうから。

＊

あの、背の高い男は、ここに立ってからずっと、チラチラとぼくのことを見ている。気になるのだろう。気にしなくてはいけないことがあるから。どう見ても不審者だ。無事に目的地に辿り着けるこ

とを、願って止まない。
ぼくはまだ五歳だけれど、世界的な水準で計ったとしても賢い、という自負がある。誰も信じてくれないけれど、ぼくは生まれたその日には話すこともできたし、様々な言葉を知っていた。色の名前、母の着ている服、今自分がいる部屋、そして地域。
テレビに出会ってからはもっと様々な知識を得た。日本語なら広辞苑並みの知識があるし、英語・フランス語・ドイツ語・ロシア語・中国語も、大学生用の辞書の代わりなら造作もない。
何故、こうなって生まれてきたのかまではわからない。いや、それこそが、ぼくが抱える最大の疑問と言ってしまって差し支えない。それを解明する為に、ぼくの知識と広大な記憶野があるのだとしたら、例え悪魔に魂を売り渡してでも、ぼくは真実を究明しようとするだろう。
それにしても、子供とはつまらない。誰からも見下されてこれからの数年間を無駄にするのかと思うと寒気が走る。さっさと大人になってしまいたい。そう、もし機材さえあれば、コールドスリープの装置も、タイムマシーンだって作れてしまうと思う。

＊

さっきから、この子は何を考えて、足元のコンクリートを見つめているのだろう。
本当にこの子はわからない。まだお乳を飲んでいる頃から「ママ」と言ってくれたし、お隣さんとは比べ物にならない早さで歩き始めた。もう絵本をすすんで読まないし、字幕のない外国のコメディー映画を観て笑う。
この子の育て方は、どの育児書にも書いてなかった。アレコレ考えて、私なりに、夫なりにこの子を幸せにしてあげようとした。でも私たちにはできなかった。この子はきっと、生まれたその日から、私たちのことを馬鹿にして生きてきたに違いない。

そこまで考えて、やっとわかった。この子は、生まれるおなかを間違えてしまったんだ、と。私たちの子供では、ないのだと。

だから昨晩決めた。夫と話して、決めた。ちゃんと別れてくれた。

まだ三十になったばかりだけれど、それなりに楽しい人生だった。最後の最後に、尋常ではないサプライズもあったことだし。うん、上出来だった。

まだ春先だから、海はいくらか寒いだろう。でも不思議と、恐いとか、不安だとか、そういう気持ちは全く無かった。

＊

あのサラリーマンは、そうだなあ、リストラ必死の窓際族。後輩にぐんぐん追い抜かれちゃって、あとが無くて、焦ってるから、ヒゲも剃ってないし、あんなに切羽詰った表情をしているんだろうな。

あのバンドマンみたいなのは、どうなんだろう、もしかしたら、これから遠くの町でライブがあるのか、それともこれからギター一本で食っていくつもりなのか。オーディション？　ないない。そんな腕前のはずがない。顔に覇気がないもの。

この親子はどうかな。子供はずいぶんつまらなそうだけど、お母さんはとても複雑そうな表情をしている。幸せそうな、悲しそうな表情。何かを思いつめている、のかも知れない。で、そんなお母さんの事なんか気にも留めないで、男の子はあちこちを見回しているの。好奇心からじゃなくて、まるで暇つぶしをしているみたい。

その人の外見をみるだけで中身なんかわからない。だから想像する。電車やバスで新聞や本を見ている人が信じられない。こんなにいろんな人がいる場所で、なんでそんな時間の潰し方をしてしまうんだろう。まるで、自分だけは違うんだ、一人にしてください、って大声で言っているようなものじゃないか。

朝のホームは新鮮で退屈だから、いろいろなことを考えてしまう。あたしは、この人たちに、どういう目で見られているのだろう。そ

んなことを気にしても何もかわらないのはわかっている。でも気になってしまう。聞いてみたい。もしそれが、自分の心のど真ん中を射抜くような文句だったらそのまま恋に落ちてもいいし、とても心外な、悲しくなってしまうような言葉だったら、そのまま死んでしまうのもいいかもしれない。

いや、それもいいかな。さっきアナウンスが流れた。もうすぐ電車がやってくる。それに飛び込んじゃうっていうのも、ありかもしれない。そしたら、車掌さんが気の利いたアナウンスを入れるの。駆け込み乗車はおやめください。電車が来る前に飛び乗るのもおやめください。

いいんだけどさ。どうせ、あたしにそんな度胸なんかないし。それに、すさんだ家出娘なんか、誰も気にしてくれないだろうからさ。

「はーぁ」

溜息をつくと、四人の視線があたしに釘付けになった。

＊

やがて電車がホームに滑り込んできた。行き先は東京。

眠そうなアナウンスが走ると、誰とも言わず白線に並び立つ。

それぞれの思惑をその身に静かに潜めたまま、誰も彼も電車の訪れを心待ちにしていた。

#12：新しい履歴書

面接官はぼくの履歴書を見るなり、眼鏡を額にずらして顔をしかめた。ぼくは先週買ったばかりのスーツの袖口を強く握って、汗でびっしょりと濡らしていた。

誤字があったのだろうか。何度も見直したし、記入漏れもない。見慣れない資格でもあったのだろうか。英検と漢検、簿記と自動車免許しか書いていない。学校の名前が読めないのだろうか。一応、わりかし有名な国立大学なのだけれど。

髪の毛が寂しい面接官は、ぼくを上目遣いで見て口を開いた。

「これ、古いタイプの履歴書ですね」

「はい？」

進路指導室で何度も練習を繰り返した。担当者の話だって完璧にメモして覚えた。でも、そんな話は聞いたことがない。古いタイプの履歴書？　どういう意味だろう。

「まあ、口頭でもいいでしょう」

面接官はぼくの履歴書をテーブルにぱさりと落として、両の肘をテーブルに付け、組んだ手であごを支えて言った。

「レベルは幾つですか？」

「レベル？」

面接官は苦笑。

「新聞は、どこのものを見ていますか？」

有名な全国紙の名前を告げると、面接官はニタリと笑った。

「では、ローカルなニュース番組は見ていないんですね？」

「も……申し訳ありません」

「いえいえ。謝ることはありませんよ。まだ試運転の状態ですし、広報もしていません。どちらかと言えば機密ですし、施工されてからまだ半年ですからね、キミが知らないのも無理はないのですが……できれば、新しい履歴書を持参していただきたかったですね」

気が遠くなってきた。でも、ここで負けるわけにはいかない。この企業は、ぼくが幼少の頃から憧れ続けてきた、いわば夢なのだ。
「大変恐縮なのですが、よろしければご教授頂けないでしょうか」
「ふむ。
この地区では、住民全員にレベルが設定されているんですよ。市役所に届け出れば今日にでも認定してもらえるでしょう。レベルが上がれば給与も上がりますし、査定においてとても重要なウェイトを占めています。商品やメニューが割引になる店舗も増えてきたそうですよ」
初耳だった。生まれ育った区の隣で、そんなことが行われていたなんて、まったく知らなかった。
「レベルの基準となるのは年齢で、その半分がまずその人のレベルになります。端数は切り捨てられます。二年に一度、レベルが上がる、ということですね。
しかし、それだけでは本当のレベルとは言えません。還暦を迎えても一度も働かず、社会におんぶにだっこされている人間のレベルが、聖人君子のような二十代よりレベルが高い、などということがあってはならないのです」
面接官は、背広のえりについている、やや大きめの茶色いブローチをいじくった。
「これは、我が社が開発したレベル認定装置です。レベル認定を申請した人間全員に配布されます。小型カメラとマイク、それと高性能のＩＣチップが内蔵されています。これで、認定者の行動を逐一監視し、市役所のデータサーバに送る。その如何によって、レベルが上下するのです。
レベルを上げるコツは、よい行いをすることです」
「よい・・・？」
「ええ。誰にも迷惑を掛けないように、誰にも必要とされるように生活をしていれば、自然とレベルは上がります。漫然と生活をしていれば緩やかにしか上がりませんが、上げる気になればいくらでも

上げられる、ということですね」
　さて、と言い、面接官は微笑んだ。
「申し訳ありませんが、レベルが認定されていない方の募集はしていません。ですが、通知をしていなかったこちらにも、非はあります。以上の点を踏まえて、半年後、再び面接を行います」
「ほ、本当ですか？」
「はい。私どもとしても、キミのような優秀“そうな”人材をよそに渡してしまうのは惜しい、と思っています。半年後、レベルが上がったキミにお会いしたい」
　それで、面接は本当に終わってしまった。ぼくは履歴書を受け取り、これ以上はない、というほどのきれいなお辞儀をして退室した。

＊

　市役所に行くと、本当にあった。年金とか国保とか、案内が書いてある看板に、くっきりと
「レベル」
　と印してあった。
　受付に向かうと、まず記入を命じられた。住所や生い立ちを書くところは履歴書と似ていたけれど、ひとつだけ違ったのは、学校生活で所属していたクラブや委員会、そしてその役職、成績なども覚えている限りで事細かに記入しなければならなかった。
　小・中学生の頃のことは薄ぼんやりとしか思い出せなかったけれど、もしかしたら、もうレベル認定は始まっているのかもしれないと思い、極力明確に書いた。空欄がひとつでもあって、そのせいでレベルがひとつでも下がったら、もったいないし、何より、ぼくに期待していると言ってくれたあの面接官に失礼だと思ったので。
　全てを記入して受付の女性に手渡すと、彼女は無表情のまま目を通して、パソコンに入力を始めた。お掛けになってお待ちください、と言った顔は笑顔だったけれど、目が面倒だと告げていた。

やがて名前を呼ばれると、まず、あのブローチを渡された。もう、ぼくの顔がインプットされているそうだ。続いて、自動車の免許証のような紙製のカードを渡された。そこにはぼくの名前と顔写真、そして一際大きなゴシック体で

１３

と書いてあった。どうやら、これがぼくのレベルのようだ。今２２歳だから、普通なら１１。そう考えると、あまり悪くない気がした。

最後に、分厚いパンフレットを渡された。折り目など付けないように、ていねいにカバンにしまい、市役所を出て喫茶店に入って目を通した。数十ページにわたって、説明がこれでもか、というほど並んでいた。

読んでみると、なかなか意外なことが多かった。レベルの認定は、あくまで本人の行動によって決まるらしい。思想や思考には左右されないそうだ。どれほど立派な考えでも、行動に移せないものは意味がない、らしい。でも、そういうものなのか、とも思った。きっと、管理も判断もしきれないのだろう。

レベルが上がると、ブローチが鳴る。それで市役所に出向き、専用の機械にレベルカードを通すと、数値が書き換えられるらしい。逆にレベルが下がった場合は、やはりブローチが鳴ってから、家だろうが会社だろうが、役員が押しかけてきて半ば強制的に機械にカードを通させるらしい。上げるのは自由だけれど、下げるのは強制。社会って厳しいな、と思った。

他人であろうと、嫌われるような、軽蔑されるようなことをしてはいけない。これは当たり前なのだけれど、その基準がまた厳しい。どうやらこのダサいブローチ、すれ違う人の視線や体温や音声を感知して識別する機能が付いているようで、しかも逐一監視している、というのだ。つまり、喜ばれるようなことをしても、嫌われるよう

なことをしても、一発でばれてしまう。これは気が抜けない。
なるほど、と呟いていた。
これは、けっこう面白そうだ。他人から評価されるのは慣れているし、その方が日々を単調に過ごさなくていいかも知れない。何より、住民全員がレベル上げを志したら、なんだかすごく素晴らしそうじゃないか。
とりあえず、レベルをひとつ上げることを目標にして、半年後には１５、いや、２０くらいを目指そう。

＊

と思っていた三ヶ月前の自分がいかに浅はかだったか。
秋、就職浪人になったぼくはまず、ボランティア活動に参加してみた。学生時代からちょくちょくやっていたことだから、労はなかった。
ただ、あの頃とは決定的に感じるものが違った。学生のときは、ただ街がきれいになるのが嬉しくて手を動かしていた。今は、絶えず誰かに背中を押されながらやっている気がして、ちっとも落ち着かない。それでも頑張り、週に三度も参加したにも関わらず、十月はとうとうレベルの変動がなかった。その事実が、ぼくの肩にずっしりと乗っかって、今もまだ取れないでいる。
そのくせ、下がるときは下がる。ボランティアで帰りが遅くなった日、食事をコンビニの弁当で済ませようとした。余談だけど、レベル割引は３０からというポスターが貼ってあった。
その時、店員が間違えておつりを多く渡した。作業で疲れきっていたぼくはろくに確認もせずそれを財布にしまった。
その瞬間、ああ、思い出したくもない、あの低くてうるさいブザー音が鳴って、ぼくのレベルは１２に下がった。
でも、これはまだいい。疲れて怠慢になっていたぼくも悪いし。
１１に下がった時はもっと酷かった。電車に乗っていたときのこ

と。席に座って本を読んでいたら、乗り込んできたおばあさんがぼくの前に立ってきつく見下ろした。そして怒鳴られた。
「さっさと席をゆずりなさいよ！」
車内は混雑もしていなければ、優先席もガラガラだった。その人には見覚えがなかったし、因縁をつけられる理由なんか全然思いつかない。
ぼくは堂々としていた。ぼくは間違ってなんかいない。ぼくに悪いところなんかないんだから。
なのに、あのブザーが鳴った。人に悪意のある大きな声を出される。それ自体が、それ自体を、ブローチがマイナスだと判断したんだ。
ぼくが落ち込むと、おばあさんはケタケタと笑った。
「これこれ。この音を聞かないとねえ」
地元では有名な、意地悪な人らしかった。自分のレベルはとっくに1で、人のレベルを下げることに固執しているらしい。だからみんな、こっそりブローチを隠すんだって、隣のサラリーマンが教えてくれた。ありがとう、と返したら、サラリーマンのブローチが軽快なアラームを鳴らした。
レベル11になったぼくは、そんなトラウマもあり、雪の季節を引きこもって過ごした。
上げようとしても上がらないのに、下がると思ってもいないのに下がる、ぼくのレベル。これで評価されてしまうのかと思うと、何もやる気が起きなくなった。
他人に評価されることには慣れている。これは嘘じゃあない。学生の頃から、ううん、子供の頃からそうだったじゃないか。ほかの家の子供より勉強ができるか。難しい漢字が読めて書けるか。計算を間違えないか。物覚えはいいか。リーダーをやれるか。そんな環境の中で今まで生きてきた。
そこまで考えて、やっとぼくは、実は評価されることに慣れていないことに気が付いた。

ぼくが慣れていたのは、比較だった。ぼくは、周りのみんなよりは勉強もできたし、どちらかと言えば頼られるほうだった。友達も多かったし、恋人だって何人かいた。でも、そのこと自体に、どれほどの意味があっただろう。どれほどの価値があっただろう。周りよりちょっとだけ頭が出ていたからって、それが何だというんだろう。ぼくが気付かずに、隣の誰かより駄目だったところが絶対にあるはずなのに、頭をなでられて、それが嬉しくて目を閉じて生きてきたんだ。

ぼくはレベルカードを眺めた。自分の名前の下、顔の隣で胸を張る１１という数値。ふたつも減ったこの数字が忌々しくてたまらなかったけれど、今はまるで記念写真を見ているような気持ちだ。

これがぼくの価値なのかも知れない。年齢相応の考えしかなく、年齢相応の経験しかないぼくの、正当な価値なのかも知れない。

でも、ここで満足なんか出来ない。正直、ブローチを投げ捨ててしまおうと思ったことは一度や二度じゃない。悔しくて情けなくて、ブローチに手をかける度に、あの面接官の言葉が頭に浮かんで、手が止まってしまう。

あの時、諦めてしまわなくてよかった。またここから始めればいいんだ。

外がおとなしくなった。雪が止んだみたいだ。窓を開けてみると、小さな虹が見えた。顔を上げたら、気分も一気に上を向いた。

「よし、やってみよう」

雲が少し残っている空を見て言うと、ブローチが気味のいい音を立てた。嬉しいようでもどかしく、頬がふにゃりとゆがんだ。

レベルは上げるものじゃない。上がるものなんだ。自分でしっかり考えて、ちゃんと自分なりに懸命に生きていれば、得られるものだってたくさんあるし、それを糧にする事だってきっとできる。それがぼくの身になるのなら、そのときに自然とレベルは上がるだろう。

そう、レベルを上げようとすることが、最もレベルを下げる行為

だったんだ。
いい天気だ。新しい気分になるには絶好の日。
ぼくはカードを大切にしまって、肌寒くも眩しい街に繰り出した。

＊

「部長、今朝のニュース観ましたか？」
気安い係長は朝礼が終わるなり私に話しかけた。いくら退屈な人事部とはいえ、いきなりはさすがに抵抗がある。
「子供を助けようとして車に轢かれて死んだ大学生に、市長がレベル５０を進呈するらしいですね」
「ああ、みたいですね」
「ま、死んでしまったら誰も彼も０なんですけどね」
そんなくだらないジョークが言いたかったのか。彼の笑いを黙殺していると、彼はやたらと目を逸らしながら自分のデスクに戻って行った。
同じニュースなら私も観た。ただし、私が覚えたのは戦慄だった。子供を助けた青年の顔に見覚えがあった。夏に面接に来た、レベルの存在を知らない彼だ。晩酌をしながらテレビを観ていた私は、その瞬間酔いを失った。
何もそこまですることはなかったのに。
確かに、人の命を救えばレベルは上がるだろう。しかし係長の言った通り、死んでしまったら０だろうが１００だろうが、意味がなくなってしまう。
レベルは確かに、この社会で重要だ。しかし自分の命より大切なものなどないのだと、彼に誰か教えてやれなかったのだろうか。
いずれにせよ、惜しい人材を亡くしてしまった。
そのニュースを拭い去ろうとするように、私はその日、仕事に没頭した。その甲斐あって、無事レベルが１４に上がった。区内最高レベルまで、あとふたつだ。

#13：relief

早く起きる必要などないのに、自然と目が覚めた。実を言えば、空のすみっこが緑に褪せるまで眠れなかった。

子供のころから慣れた、突然復活するこの習慣。時計なんか確認しなくても時刻はちゃんとわかってる。６時だろ？　正解、と時計が鳴った。

少しだけ力を入れて起き上がる。何かの決意か、それとも得体の知れない覚悟の表れか。まるで何かから逃げるように。

―参ったな

おれは頭を何回か掻いてから、白いジャージに着替えてロードワークにくり出した。

父は野球バカだった。小学生のころから少年野球のチームに入り、六年生には控えの投手としてチームを支えていた。中学、高校と歴史は続き、夏の甲子園の地区予選の準々決勝まで残ったんだ、と酒が入るたびに自慢していた。

温厚な人だった。大切なものをおれが間違って壊してしまっても、苦笑いして頭を撫でてくれた。やんちゃさがたたって機嫌を悪くするようなことをしても、数時間後にはけろりとして普段どおり接してくれた。だから、おれが野球をやりたい、と言うまで、おれに野球を強要することはなかった。

野球をやりたい。そういえば、動機は不純だった。親父にはひとつだけ譲れないライフスタイルがあった。ひいきのチームの野球中継だけは絶対にテレビで見て、隣の家まで届くような大声で声援を送る。おれが野球をやってみたかった、勉強してみたかった理由は、そうすれば、その退屈な時間が少しは楽しくなるかもしれない、という、浅はかでつまらない理由だった。

親父は、直接おれに言うことはしばらくなかったけど、相当嬉し

かったみたいだ。うちがそれほど裕福でないことも知っていたから「安ものでいいよ」と言ったのに、初めが肝心なんだ、と言ってかなり高価なグローブを買ってくれた。数年ぶりに買った自分のグローブは、その何分の一かの安ものだったくせに。

地元のダサい名前のチームに入り、新しい友達もでき、なんとか守備練習に加われるようになった頃から、休日の過ごし方のベーシックが河川敷でのキャッチボールになった。

「違う、肩はこう使うんだ」

「足をもっと前に、まっすぐ出してみろ」

人が変わった、は少し言いすぎだけれど、親父のあんな表情が見れるのはその時だけだった。バットも使わない、強い球の飛んでこない練習は退屈だったけれど、親父の意外な一面を見れるその瞬間が、きっとおれはそれなりに楽しみだったんだと思う。

住宅街の舗装された道を通り過ぎる。そろそろ体が汗のかき方を思い出してきた。これから坂を下る。

やがてピッチャーになれたものの、これと言ってパッとしないまま少年野球は終わり、中学でも流れで野球部に入部したまではよかったものの、そこが完全な年功序列制だったことにより、おれのモチベーションは見事に地に落ちた。

自分よりずっと下手な人間の球拾い。大人になった今だって、そんなもの楽しめるわけがない。

比例するように、親父とのキャッチボールも減っていった。隔週だったものが月一になり、なくなった。

「良継（よしつぐ）っ」

と言い、部屋の外でグローブを握って笑って見せる親父。それがうっとおしくて、怒鳴り散らした。

感情性豊かな母親が大声を上げて割り込んできても、親父は絶対に声を荒げなかった。ただ静かに、台詞じゃないかと疑ってしまう

言葉を言うだけだった。
「焦るな、良継。先輩たちだって、やっと守備練習をしているんだ。お前も、その姿をしっかり見ておきなさい。それが必ず、お前のためになるんだよ」
最後までその台詞を聞いたのは、最初の一度しかない。それ以降は途中で、悪い日は何も言わせず
「うるせえ」
と蹴散らしていたんだから。

この坂はこんなに急だったっけ。いや、ペース配分がおかしくなっているんだ。スピードがどんどん上がっていく。

先輩が怖くて、だと思っていたけれど、おれが律儀にも毎日欠かさず練習に出ていたのは野球が好きだからなんだと気が付いたのは、中学野球の引退試合で負けた日だった。
受験というシーズンオフになってから、おれはやっと親父との休日を復活させた。久しぶりに受け取った親父の球は弱く、おれの球を受けた親父は痛そうに手を振りながら苦笑いをしていた。
野球での推薦が取れなかったので、必死に勉強して名門校に入学、ブレザーに袖を通すより前に野球部を見学、入部した。今度こそ、腐らずちゃんとやるんだと覚悟していったのに、ザコなりにしてきた努力が報われて、二学期の期末試験が終わったころには控えの投手として肩を温めるようになった。そのことを親父に報告したら
「さすがはオレの息子だ」
と鼻を鳴らしていた。
初めて投げた試合が１２対０という結果に終わり、３回登板８失点だったことを親父に不機嫌に伝えると
「さすがはオレの息子だ」
と苦笑いしていた。
三度目の春、甲子園地区予選初日前日。

親父のひいきのチームの初戦。おれは初めて親父の晩酌に付き合った。ビール党の親父が、わざわざ甘ったるいカクテルをぶら下げて帰ってきたときからなんとなくそんな気はしていた。何より、ずいぶんとにやついていた。

「どうだ」

「何が？」

「野球。楽しいか？」

「ああ、仲間もいるし、一生懸命にやるのは楽しいよ」

「そうか」

母お手製のサラダをつまむ。

「ピッチャーはどうだ？」

「どうだって言われても・・・」酒とは呼べないほどのアルコールをちびりと舐めた。「もう、ここが自然だからなあ」

「そうか」

グラスに半分残っていたビールをあおり、おかわりを注ぎ始めた。

「なあ、良継」

「ん？」

「先発、中継ぎ、抑え。どれがいい？」

「いや、どれでもやるし」

「監督に選べ、って言われたら、どれを選ぶ？」

ううん、としばらく考えた。

「先発は、完全試合とかの可能性もあるし、ゲームを作る重要な位置だから、プレッシャーは大きいけど楽しいよ。抑えも、反撃を許さない、って感じで、カッコいいよな。うん、選べ、って言われたら、そのどっちかかな」

「そうか」

ビールは、グラス一杯にいくらか足りなかった。それを機に、親父のひいきのチームは負け始め、会話もそこで途絶えた。

結局言い出せなかったのだ。今日言おうと、もう何ヶ月も前から決めていたのに、その話題にすることすらできなかったのだ。

高校で野球を辞めます、と。
春は初戦で敗退。地元の新聞に有力視されていた夏の大会も二回戦敗退。春は投げなかったけれど夏は中継ぎで登板、４回無失点だったにも関わらず結果を残せなかった。悔いは残った。しかしこれは背負っていかなければならないものだと、おれの野球人生の結果なのだと、強がって前向きに受け取った。

河川敷の風はそれなりに冷えていて、気持ちよかった。
まだ走れそうだったけれど、いつもどおり、ここで折り返すことにした。

大学の合格通知が届いた日、すっかり当たり前になった親父との晩酌の席での話。
試合中継が終わると、親父がそっとテレビを消した。でも席は立たない。
「大学では、野球はやらないのか」
「ああ」
「そうか」
なら言いたいことがある。そう、親父は言った。お前が野球をやると言った日から、このタイミングで言っておこう、と思い続けていたことがある、と。
「オレは子供のころから、ずっとリリーフだったんだ」
「あ・・・」
「いや、別に怒ってるわけじゃあ、ない。先発だって抑えだって、お前の言うとおりの位置だと思うし、正直、なんでオレがリリーフなんだって思ったことだって、ある」
でも、オレは今、リリーフが大好きだ。出番が少なく、目立たず、イメージの悪いリリーフが大好きだ。そう言う親父の表情は、今まで一度だって見たことの無いものだった。
「リリーフに必要性は無い。先発が相手を抑え、その間に点を取り、

最後に絶対に打たれない抑えがしっかりと仕事をしてくれるなら、リリーフなんかいらない。そうだろう？」頷いた。
「でも、なんでリリーフが登板するか。リリーフが必要だからだ。先発が崩れ、このままではどうしても流れが悪くなる。そんなときにお呼びがかかるんだ。もちろん人それぞれだが、リリーフには持久力のない者が多い。もちろん抑えほどではないが・・・その、アレだ、やっぱりちょっと、見劣りするヤツが入るところなんだな」
いつもの苦笑い。
そしてまたあの顔。
「リリーフは大変だ。先発が崩したゲームを建て直しながら、場合によっては抑えに引き継がなきゃならない。でもそれは、とてもありがたくもあるんだよ。
わかんないか。受け継いで、引き継ぐことができるんだ」
ちょっと恥ずかしいことを言うぞ。親父は身を乗り出した。
「オレはオレのことを、お前のリリーフだと思ってる」
身震いがした。
「と言っても、オレは野球しかやってこなかった男だ。オレはお前に野球しか、野球で教わったことしか、引き継げなかった。本当に情けない父親で、申し訳ないと思ってる」
うつむいて、何度も首を振った。
「これからお前は大学に行く。そこでお前が何を目指しているのかはわからない。でも、どんな状況になっても、ここでお前が抑えに、エースになることを信じて願っている人間が“二人”、いつでもいることを忘れないでくれ。体に気をつけて、頑張りなさい」
泣きながら、「はい」と言うのが精一杯だった。

帰ると妻が起きていた。
「早起きね」
「たまにはね」
「走ってきたの？」

「久しぶりに」
「せっかく洗濯物を片付けようと思ったのに、今日は雨かな」
「いい天気だったよ」
日曜の朝らしく、少しグレードの低い朝食を、目をこすりながらせっせと作っていた。
まな板と包丁がぶつかる音を聞きながら浴室へ進む。熱めのお湯を思いっきりかぶったら、やはり無理がたたったのか、夕べのサラダとアルコールを戻してしまった。
全部をやたらと念入りに洗い、上がり、着替え、寝室へ。
ごちゃごちゃしたおもちゃに囲まれて、息子が健やかな寝息を立てていた。
頬を撫でる。使い古したミットのように柔らかい。
リリーフとは、こんなに大変な仕事だっただろうか。
—やっぱり先発はすごいな
しかし、親父もまたリリーフだったのだ。
では、おれみたいなヤツは、この子に何を引き継げるのだろうか。
息子が目を覚ました。急いで笑顔を作り、朝のあいさつをした。
隣の部屋で、ご飯だよ、と妻が呼んでいる。

#１４：血の管（前書き）

ご注意

この作品は、実在の人物、事件などとは一切関係ありません。

#14：血の管

いつから始まったかわからない。そんな友情が誰にでもひとつやふたつくらいあるだろう。いや、もしかしたら、そもそも友情なんてそんなものなのかも知れない。

ともかく、オレと彼の出会いの付き合いは、出会いもきっかけもあいまいなまま十年目を迎えようとしていた。

妙なやつだ、と思っていた。いつもおどけていたかと思えば、ふと地球の裏側を見ようとしているような遠い目になる。しかし考えを聞いてみればよくわからず、というか拙く、到底理解できるものではなかった。極めつけはあの特異な趣味。正直に言ってしまうと、オレは彼が苦手だった。それでも交流が続いていたのは、何度考えても惰性だったとしか思えない。でも、惰性を切る理由が見つからなかったのだから仕方がない。しかし、これも逃げでしかないとわかっている。

ああ、えっと、何の話だったっけ。

そうそう、その友人が先日、亡くなった。

車と車の事故で、友人が信号無視をして大型トラックに薙がれて、即死だったらしい。

訃報を聞いたとき、オレは自分でもびっくりするくらい落ち着いていた。最初に考えたのが

「となると、通夜や葬儀は明日あさってくらいか。予定入ってたっけ」

だったくらいだ。なんとも友達甲斐のないヤツだろう？

でも、彼にも理由はある。

彼の趣味はリストカットだった。汗が止まらないような日でも長袖を着て、さらにリストバンドを常備しているから周りの人間は知らなかったかもしれないけれど、本当にしょっちゅうやっていた。

仕事の面接に落ちました。ざくり。

彼女とケンカしました。ざくり。
都合の合う友達がいません。ざくり。
よくもまあ簡単に、と、逆に感心してしまうくらいよく切っていた。
故人曰く、
「安心する」
んだそうだ。自分は生きていると、実感できるんだそうだ。
この理論、キミはどう思うだろうか。
オレは馬鹿げていると思うんだ。
だってそうだろう？　生きていると実感できる瞬間なんて、もうたくさんだ、って投げ出したくなるくらい溢れているじゃないか。汗水垂らして働いたあとの食事、好きな人の手を握ったときの胸の高鳴り、失敗を犯してしまったときの絶望感。わざわざ自分を傷つけてまで感じるものじゃあ、ないんだよ、そんなもん。
でも、まあ、それに気が付けなかったから、あんな馬鹿なことをしていたんだろう。そう思えば、納得もできなくはないし、何より胸が強く縮められてる気持ちにはなるけどさ。
で、それでも満足できなくなってしまったから、あんな自殺まがいの暴走をやらかしちまった、ってわけだ。
驚いたのはここからなんだけどさ。
葬儀もつつがなく終わって、いつもの日常に放り出されてしばらくして、ふと気が向いてジョギングに出たんだよ。そう、いつもならとっくに寝ている午前3時に。運動なんかとんとしてないのに、気合い入れてジャージなんか引っ張り出しちゃってさ。首にタオルまで巻いて、駅のそばの河川敷まで走っちゃったんだよ。
いやあ、思い出すのも恥ずかしい。
川の正面まで走ってさ、叫んじゃったんだよ。なんて言ったかはわからない。多分、言葉なんか言わなかった。ただ声を出したんだ。そりゃもう、とびきりの大声で。
叫べば叫ぶほど、思い出が沸いて出てくる。どうしようもない思

い出だよ？　ただの日常。そういうのがここぞとばかりに飛び出すんだよ。

やっぱり、悲しかったのかな。それとも混乱してたのかな。でもとにかく、辛かったんだ。

何ができたかとか、もしかしたらそうなる前に何か言ってやれたんじゃないか、って、ぐるぐる考えちゃうんだよ。もし、そういうのを先に思いついて、実行に移せたとしても、きっと何も変わらなかったってわかってんのに、考えちゃうんだ。

こういうのがエゴなんだろうなあ。やっぱりオレは、アイツの友達にはなりきれてなかったんだろうなあ。

時折目に涙を浮かべながら、彼は極力おどけて話してくれた。私は今日ほど、彼と同時に休憩に入ったことを悔いた日はない。

掛ける言葉はない。もう顔も見れない。見た瞬間、言いたいことが堰を切ってあふれ出してしまう。そしてもし本音を言ってしまえば、彼は今後、冒頭の語りのときのような目で私を見るようになるに違いない。それは嫌だ。そんなのは辛くてたまらない。絶対に我慢できない。

彼の話はもうしばらく続いた。私は、手首の傷を隠すために、こっそりと袖口を掴み続けることに必死だった。

#15：不治の病

すっかり日が長くなった。窓の向こうの太陽はまだ傾いてもいないのに、腕時計は五時半を示している。うだるような、とまでは行かなくても、昼間のふぞろいな雨の名残もあり、粘り気のある暑さが図書室に満ちている。

千草はぼくの原稿をテーブルにそっと置くと、腕を組んで考え始めた。なんと言えば効果的か。どんな言葉が適切か。

もちろん、ぼくの心中は穏やかではないけれど、千草のこの仕草はなかなか好きだった。こっそり見とれていたら、首を汗が伝った。シャツのボタンをいくつか外す。

「４ページ目」

千草は左目を守っている医療用の眼帯をコリコリ掻きながら講評を始めた。

「悩みながらコマ割りしたでしょ？」

「ああ、うん」

「ちょっと読みにくいかな。スピードを抑えて読ませる場面だってのはわかるんだけど、だからこそもっとていねいに表現してみてもいいかもね」

的外れとはいかなくても、意に反すること、またはぼくの考えを射抜き損ねた言葉が飛んできたらディスカッション開始。

「でもそこは、主人公がヒロインを思い浮かべて迷うシーンだよ。確かにいくらか荒いように見えるかもしれないけれど、スムーズに読み流されるよりはいいと思う」

「前後のリズムが軽快なのに、わざわざここで崩す必要ある？」

「読みにくいって言うのはさ、意味がわからないってこと？」

「読むのに時間がかかるってこと。視線が行ったり来たりはしないけどこの順番でいいのか慎重になっちゃう」

「なら狙い通りかな」

千草は量の腕をテーブルに伸ばした。
「じゃあ、５ページ目を調節したほうがいいかも」
「標準的なコマのサイズと構図だったと思うけど」
「だからだよ。４ページのペースのまま５ページに行くと、５ページの見栄えが減る。もう少しのんびりしたほうが、作品に流れができていいと思う」
それはそうかもしれないと思った。メモ帳に殴り書く。
あとは、と千草が口を開いたところで、えんじ色のシャツを着た図書室の先生がやってきて退室命令を出した。
命令と言ってもきつい言葉はなく、時間ですよ、とやわらかく言われるだけ。なにせ、ぼくと千草はこの学校で唯一の図書室の常連。生徒と先生だからではなく、顔見知りだからこそ通う気持ちもある。

＊

千草がプルタブを引くと、コーラが泡となってじわじわと噴き出てきた。彼女は慌ててそれをすする。ぼくは小さく笑いながらコーヒーを飲んだ。
遠くでは、野球部が大きな声を出している。校舎の向こう側がグラウンドだ。なんでも、明日の試合に勝てば甲子園出場らしい。相手はもちろん県下屈指の強豪だし、うちが決勝に駒を進めるのは初めてのことだそうだ。ルールも理解していないし、どちらかと言えばサッカーのほうが好きだけれど、ぜひとも頑張ってほしいと思う。
「８ページ目なんだけど」
「うん」
「あの展開は好きだな。表現技法も好みだったよ」
千草がまっすぐぼくの作品を褒めることは珍しい。気分が高まり彼女のほうを向くと、右目がぼくをまっすぐ見ていた。
「ありがとう」
「うん」

でもね、と言う。
「そのあとがグダグダしてたかな。黒い髪の男の子がいたでしょ？あの子のキャラがちょっと弱い」
「まあ、そこまで重要ではないよね」
「でも必要だよね」
「うん」
「構成上どうしても出なくちゃならなくて、挙動に意味があるキャラなのに、アレじゃ駄目だよね」
ストレートな言葉で言われるときは本当に駄目だということだ。
「無理にキャラを持たせるほどではないと思うんだ」
「でも空気じゃもったいないよ。厚みがあって立体的なほうが、あの作品には合うと思う」
例えば、あの漫画がアニメ化されたら、あの子供の声優はエンドロールの最後に意味ありげに浮かんでくることだろう。そういう位置に“彼”はいる。一度読んだだけで、極力隠していたそこを見抜いてしまうなんて。やはり彼女に見せなくては意味が無い。
議論はもう少し白熱するかと思ったけど、風紀委員の顧問に見つかって学校を追い出された。日は傾き、上着を羽織ろうか迷うような、暗い世界になりつつあった。

＊

どこにでも半端者がいることは、うすうす誰もが感じていることだと思う。クラス、部活、バイト先、はたまた家族。そこでは本気ではない人間が必ずいる。でもそれは仕方のないことで、何故ならその人物にはそこが本領ではないからなんだと、ぼくは千草に会って気が付いた。
漫画研究部なんてものはなかった。そう名乗っているところはあったけれど、ふたを開けてみれば漫画好きが自分の好みの作品を祭り上げて、そこに互いに拍手を送るような、鬱陶しいところだった。

もちろん、本気で漫画を創っている人間なんかいなかった。
置物のように静かに、エアコンのようにこっそりと作業することにも慣れ始めた一年前の六月、千草が入部してきた。アイドルのような顔立ちと絵に描いたようにきれいな髪は、女子が圧倒的に多かった部内でも必要以上に目立っていた。
千草もまた、本気で漫画を愛する人だった。ただし、自らがペンを握ることはなかった。彼女は、編集者志望だった。絵が描けず、ストーリーが思い浮かばない。それでも漫画に関わりたかった彼女は、編集者としての技術と知識をむさぼり続けていた。
ぼくは千草に原稿を見せた。とても緊張した。同い年くらいの女子と話すこと自体、必要がなければやってこなかった。それでも、ありったけの勇気をふりしぼってまで、ぼくは彼女に声をかけ、下書き段階の原稿を手渡した。
純粋に興味があった。自ら編集者を名乗る、およそ業界には不釣合いそうな彼女は、どんな言葉をくれるのか。
隣のテーブルでは相変わらず黄色い声を上げながら漫画を読んでいる連中がいたけれど、それら雑音を見事に貫通して、千草の言葉はぼくの胸に飛び込んだ。その日も、今日とまるで違わず、手元の設計書を見ているかのような口調でぼくの作品を講評した。
彼女の言葉を聞いた途端、鼓動が大きくなり、まるで世界が広がったような錯覚を感じた。千草の酷評を受けても、ぼくの体と頭は一向に静まる様子がなかった。
確信した。彼女と話せば、ぼくはもっと前に進める。
その日から、放課後の図書室はどんどん静かになっていった。窓際のテーブルに原稿を広げ、チャイムさえ耳に入らないほど熱を入れて議論するぼくと千草。本気は半端を砕く。気まずくなったのか、それともぼくらが邪魔だったのか、他の部員はある日を境に、誰一人姿を見せることがなくなった。
進級し、部員が正式に二人になり、部費が小遣いよりも少なくなっても、特に用事がある日を除いて、ぼくらは毎日顔を合わせては

図書室の先生に急かされるまで意見をぶつけ合った。心地よく、やや大風呂敷に言えば、生きていることを実感できる、かけがえのない時間だった。

＊

人通りの少ない、住宅街の十字路。真っすぐ行ったところにはぼくの家が、左に曲がって少し行ったところには千草の家がある。

やや疲れている街灯の下で、ぼくはふと足を止めた。

不完全燃焼だったのだ。今日はどの議論も尻切れトンボで終わってしまった。数十分の帰路も、ぽつりぽつりと作品の話が出るだけ。それは考えながら、思い返しながら話しているからなのだけれど、やはり物足りなかった。最近、こういう日が多い。

「ねえ」

呼びかけると、千草も足を止めて振り向いた。

「左目、まだ治らないの？　結構前から痛めてるみたいだけど」

ああ、と彼女は微笑んだ。彼女はぼくの足元を見ていた。

「伊達なんだ」

「伊達眼帯？　聞いたことないな」

「これも、編集者としての技術なんだけど」

「そうなの？」

「そうなの。だって」

「なにさ？」

「達也、私が両目で顔を見ると、視線逸らすんだもん」

彼女は顔を上げた。ぼくは意識して目を胸元に落とし、余計に駄目だと気付いて、かばんのひもを握る細くて白い指を見ることにした。

初めて言われた。そんなつもりはなかったから、少しだけ胸焼けを覚えた。

「不便じゃないの？」

「大丈夫だよ。部活と、今以外は外してるから」
それはそれで解せなかった。
なんでぼくは目を逸らすんだろう、と考えてみた。すぐに答えは出た。彼女はとても美人で、ぼくは取り立てて誇れる見た目でもないからだ。無意識に引け目を感じていたのだ。
いや、なんで引け目を感じなくてはいけないのだろう。ぼくは漫画を描いて、彼女はそれに対して意見を言うだけだ。技術と知識と感性がモノを言う間柄だ。外見なんかで遠慮はしていられない。他にもっと大切なことがあるからだ。
「気を遣わせてたんだ。ごめん。明日から、してこなくても大丈夫だから」
彼女は強めに首を振った。
「別に意地を張る場面じゃないだろう」
ぼくの言葉も少しとがった。
「やだよ、信用できない」
こういう議論は長い付き合いでも初めてだ。感性と気持ちしか、頼れない。なんとも心もとない。でも負けちゃいけない。
「あのさ……」
「信頼している人間に、目を逸らされるってことがどれだけ辛いか、達也にわかる？」
ぼくは彼女に目を逸らされたことがないのでわからなかった。
「私ね、達也と漫画の話をしている時間が大好き。もちろん、達也の漫画も好きだよ。だから、そういう時間が台無しになっちゃうのが、本当に嫌なんだ。だから、これからもずっと、私の左目は悪いままだよ」
景色がアスファルトだけになっていた。
許せないシーンやページを絶対に許さない彼女が、そこまではっきり言うのだ。本当に「本当に嫌」だったんだろう。
そこまで嫌なら、表情にも出ていたはず。
じゃあ、ぼくはなんで、それに気が付かなかったのだろう。

図書室の景色を一年分振り返る。
原稿と、眼帯と、細くて白い指しか出てこなかった。
なんてことだ。
顔を上げた。
ぼくが口を開くより早く、それを拒絶するように、千草は顔の前で手を振っていた。
「じゃ、また明日、部活でね」
言うと、彼女は曲がり角に消えた。ぼくは鉛のようなめまいと吐き気で、彼女を呼び止めることができなかった。
こみ上げるものをなんとか抑え、踏み出し、夜に飲まれていく彼女を見つめた。
彼女は眼帯を外して、ポケットにしまってから、何度か目をこすっていた。

＊

夕食を半分以上残し、自分の部屋に入り、机に向かって、突っ伏した。
明日も、今日と同じ部活ができるだろうか。それだけが気がかりだった。もしかしたら、千草はもう来てくれないかもしれない。そうなってしまったら、ぼくはもう部活にも出る気にもなれないし、ペンを握る気力さえ、なくなってしまう。
とっくにわかっていた。ぼくは、もうずいぶん前から、彼女に見せるために漫画を描いていたんだ。こうに描いたら彼女はなんと言ってくるだろう。このページはきっと気に入ってもらえるだろう。そんな想像をしながら描いたこともあった。つまり、彼女から満点をもらいたいんだ。
もちろん、漫画家のプロになる志はなんら変わっていない。むしろ、千草と話すたびに強くなる一方だった。でも、同じように強くなっていくもうひとつの想いが、確かにあった。

かばんから原稿を取り出す。４ページ、５ページと読むと、確かに読み手として準備が必要だった。８ページは会心の出来だった。少年が際立てば、いいアクセントになりそうだった。

直そう。ぼくにできることは、それしかない。

一度筆を加えてしまった原稿を修正しても、まったく無視することはできない。消しゴムで消しても筆跡が残る。ホワイトで塗りつぶしてしまうこともできるけれど、それでは「ここを間違えました」と言っているようで、あまりにもカッコ悪い。

ならばいっそ、まっさらなところから書き直すべきだ。前よりもよくなるし、読みやすくなる。そのページだけぽっかり浮いてしまうこともあるけれど、それが気に入らないならまた全部書き直せばいい。

今のぼくに、完璧なんかない。だったら間違えながらでも、少しでも前に進むしか、ない。

＊

遠いところで雷が鳴っている。昨日とはうってかわって、滝のような夕立を予感させる曇天だった。

入念に原稿を見直し、指摘されそうな箇所の見積もりと、言われそうなことに対する反論を考えていると、図書室の扉が開いた。

千草の左目は治っていた。

「あ……」

彼女は苦笑。

「寝不足でさ。いろいろ考えてたら、忘れちゃった」

「そう、なんだ」

「今日は寒いね」

「うん。面倒がらず、ブレザーを持ってくればよかった」

彼女が定位置に腰を降ろした。腕を組み、背もたれに寄りかかっているけれど、薄く笑っている。ぼくは彼女の左目に泣きホクロが

あることを初めて知った。
そして、強かった。皮肉でなく、絵に描いたような、まっすぐな目をしていた。
ぼくは千草の目を見つめて、原稿を差し出した。
「昨日言われたところを直してきた」
彼女は目を丸くした。
「一晩で？」
「うん」
「ちゃんと寝られたの？」
「空が白くなるまで悩んでたけど、現国と世界史の時間によく寝たから、大丈夫だよ」
「そっか」
呟いて、千草は原稿に目を落とした。手を加えていないページを飛ばして、四枚目。
「ホワイト使わなかったんだ」
「こだわりって言うか、ポリシーなんだ」
うなずきながら読み進める。ぼくは彼女の視線を追っていた。
最後のページを読み終えた。千草はふうん、と言うと、ぼくに笑顔を見せた。
「うん、この方がずっといい。細かいことがいくつか目に付くけど、これはこれとして完成したね」
大きく息を吐いた。
「ありがとう」
「うん。お疲れ様でした。読ませてくれてありがとう」
その一言が嬉しくて、ぼくは手元に目を落とした。
「……」
「……？」
「……」
「……あっ」
大急ぎで顔を上げる。

彼女は相変わらず笑顔だったけれど、眉が大きく下がっていた。
「ご、ごめん……」
いいんだよ、と千草は言う。右手がポケットから這い出てきていた。ひもの付いた、白い四角が握られている。
「これは私のホワイトだから」
こうして、彼女の左目は隠れてしまった。
今ならわかる。彼女の顔に、白いそれはあまりにも似合わない。
ぼくは苦笑いをうかべながら、机の下で爪がめりこむほど拳を握っていた。抑えが効かず、皮膚が裂けたのがわかる。
この傷はやがて治る。でも彼女の左目は、ぼくにしか、なおせない。

#16：猫は見ている

小さい頃から動物が好きだった。ふさふさした毛、ころころしたフォルム、くりんと可愛い眼。どれもたまらないじゃないか。

特に猫が好きだった。これはぼくの感想だけれど、連中は人間に似ている。子猫は何もかもを射抜いてしまうような真っ直ぐな表情をしているし、大人の猫は全てを見透かしたような深い目をしている。言葉が通じないぶん、理解もできないから、ぼくはまるで怖がるみたいに彼らのあごしたを指先で転がす。すると、目を細めて隠してしまってから、彼らはぼくの手に頭を乗せるんだ。

営業周りの途中、たまたま通りかかったビル街の裏路地で、1匹の猫を見つけた。正確には、この段階ではまだ見つけてはいなかった。路地の暗がりで、ホタルみたいに薄く光る一対の円を見かけただけ。

ぼくは腰を落として、ゆっくり忍び足で近付いた。見下ろされること、それを猫が嫌がると、ぼくは知っていた。

やっぱり猫だった。ひどく汚れた、黒猫。あまり大きくないし、何より線が細い。こんなオフィス街では、餌の調達にも苦労するのだろう。抱き上げてみると、中身が空っぽみたいに軽かった。

頭を撫でてやると、ぼくの手を舐めてきた。のどを触ってやると、手のひらに甘えてきた。さすがに人は怖がらない。それどころか、こいつからは、なんだか媚びているような雰囲気さえする。

ぼくはしばらく、両手を一瞬も止めないで猫をかわいがった。頭、のど、背中。手の油で毛がつややかになるまで、ぼくは手を休めなかった。

そうすることで時間を潰していた。

営業という仕事は厳しい。人と話すのは苦手ではないけれど、見下されるのは嫌いだ。人見知りもするから業務も苦手。もちろん、

この職種の楽しみややりがいは知っている。でも、もう長いこと味わっていないから、ぼくの中でどんどん価値が薄れていっている。
ぼくがこうして時間を潰している間にも、ライバルたちは新しい紙に新しい判子を押してもらっているに違いない。悔しくないわけではないけれど、見返してやろう、とは思えていない。
やがて日が落ちてきた。もうとっくに会社は終わっている。じゃあ、名残惜しいけどお開きにしよう。
猫から手を離した。彼はすっと立ち上がるぼくをじっと見つめている。
また来るよ。膝で手のひらの毛を叩いて、小さく呟いた。
「なあ」
猫は高い声で鳴いた。ぼくはその声に後ろ髪を引っ張られながら、二駅向こうの会社を目指した。

＊

もう誰も残っていない、暗いオフィス。机の上には見覚えのない書類が山を二つも作っていた。一番上の一枚を眺めてみると、どうやら過去の資料のようだった。それも五年も六年も前のものだ。
トイレから戻ってきた課長が気の無いお疲れ様を言った。
「悪いんだけどさ、それ、今晩中にまとめておいてくれない？　明日の会議で急に必要になっちゃったんだけど、他のみんなは忙しいらしくて、他に頼める人がいないんだよ」
体こそいいものの、つまりはぼくが暇そうで仕事をしていないってこと。もちろん、反論の余地はない。
ぼくが返事をし、作業を始めると、部長はそそくさと退社してしまった。帰りたくて仕方なかったのだろう。待たせてしまって申し訳ないし、それとはまた別のベクトルで嫌な気分になった。
1時間も作業を進めたころだろうか。隣で人の気配がした。同期の小林だ。

「お疲れ様」
「おう、お疲れ」
「今まで外回り？」
「それと、接待な」
「キャリア組は大変だね」
「仕事のうちさ。ま、疲れるけどな。
……なんだ？　そりゃ。残業にしちゃあ色がないな？」
「明日の会議で必要なんだって」
「ふうん」
小林はぼくの肩に手を置いて、頬を歪ませた。
「お前、今日はサボってたろ？」
つまらなそうに答える。
「なんで？」
「猫の匂いがするぜ」
彼もまた、無類の猫好きだった。
「ちょっと触ってただけだよ」
「へえ、そうかい」
この様子では、彼は見透かしている。ぼくが午後いっぱい、猫を触っていたことを。
「ま、ほどほどにしておけよ」小林は席を立った。「おまえ、人事課で話題になってるぜ」
「リストラ？」
「簡単に言うねえ」
「準備も覚悟もないけど、予感はしてるから」
「へえ、そうかい」
小林はぼくの肩を叩いた。
「ま、気をつけてな」
「うん、お疲れさま」
彼はわざとらしく鼻歌を歌いながら帰っていった。
時間にすれば数分というこの場面を経験しただけで、ぼくの気力

はあっさり空っぽになってしまった。そういえば約束をしていた彼女から電話がきても上の空で返してしまったし、泣きながら切り出された別れ話も快諾してしまった。商談もこんなふうにスムーズだったら楽なのに。単純作業を繰り返しながら、ぼくは悲しむように目頭を押さえた。

結局、残業は終電ギリギリまでかかった。

翌日の会議で、その資料が使われることはなかった。

＊

ネクタイをしめて会社に出向き、資料や商品なんか何も持たずに外回りに出て、猫の待つ路地で時間を潰す。それがすっかり日課になってしまってから、あっという間に1週間が過ぎた。まばらだった飲み会の誘いはまったく無くなり、周りの誰もがぼくと関わることを避け始めた。

黒猫はいつもいてくれた。ぼくが手を伸ばすと近付いてくれたし、素直に甘えてくれた。ポケットに突っ込んでおいたビスケットを差し出せば、美味しそうにむさぼりついた。

頭を撫でながらつぶやく。

「いいなあ、お前は」

その途端、猫は

すっと首を伸ばし、体の向きを変えて

軽やかに、重い色の塀を登って、ぼくを見下ろした。

「なあ」

見下ろして、鳴く。

強く、とても強く見下ろされ、

いや、

見下されたような気がして、ぼくはそそくさとその場を離れた。

＊

週の初め、会社に行ったら、ぼくの机がなくなっていた。
予測できたことだ。仕方のないことだ。何回自分に言い聞かせても、結構こたえた。
どこに行こうか。これからどうしようか。そんなことを考えていただけなのに、気が付いたらあの路地に来ていた。どうやら、ぼくは本当にこの場所が気に入ってしまったらしい。猫と触れ合えるからなのか、あの猫に会えるからなのかはわからない。
でも、黒猫はいなかった。ゴミ箱の裏、忘れられた看板の陰、ぼくを見下ろしていた塀の上。とうとう猫にまで愛想を尽かされたみたいだ。
哀れで情けない自分を笑い、大人しく帰ろうとした
その視界に
あの黒猫が映った。
二車線の大通りの向こう、太陽の下で、薄汚れた大きなものを咥えている。
あごを離す。
白猫、の、遺体だった。
息を呑むと、同時に吐き気がこみ上げた。
黒猫の視線がぼくを貫く。
「なあ」
遠くの信号が赤から青に変わり、遠くの町からやってきたトラックや派手な色の乗用車が色の塊になって目の前をかき混ぜる。
「なあ」
エンジンの音。
「なあ」
タイヤがアスファルトを削る音。
「なあ」
遠くの街頭テレビの呟き。
「なあ」

それに隠れるようにして
いや、それらを掻き消すように
「なあ」
あの黒猫がぼくを呼んでいる。
呼んでいる。それは間違いない。でも遊歩道も地下道もないし、歩道橋はビルの向こうにしかない。ここの信号はなかなか変わらないことで有名だ。かと言って、ぼやぼやしていたら彼は帰ってしまうかも知れない。いや、ここで彼のもとへ行かなければ、もしそのタイミングを逃してしまったら、もう彼には二度と会えない。そんな予感がする。
なら、
「ああ、」
そうか。
このまま真っ直ぐ行けばいいんだ。
猛スピードで先を急ぐ車は、ぼくの行為を許しはしないだろう。文字通り、黙殺するに違いない。でも、それが何だって言うんだ。もう誰も、そう、彼以外は、ぼくを呼んでくれる人なんか、いやしない。
覚悟を決めても、一歩目が踏み出せなかった。仕事も恋人も、友すらなくなってしまったぼくなのに、最後の勇気すら、なくなってしまっていた。
痛いのが怖かった。
死んでしまうのが怖かった。
でもやっぱり、彼に見限られてしまうのが嫌だった。
腹を括った。
行こう。最後になってしまってもいいから、もう一度、彼を撫でたい。
ちょうど、信号が赤に染まった。今なら、なんとか行ける。
黒猫は目を細めて
「チッ」

向こうの路地の影に溶けた。

＊

突然携帯が鳴った。律儀なことに、自分をクビにした会社の番号を、ぼくはていねいに取っておいていた。あれから何ヶ月経ったかわからないけれど、ぼくはやっと紹介してもらった派遣先で、来月から社員として扱われることが約束されていた。絶好と言えばそれらしく、今更と言えなくもないタイミングだ。

出る。部長からだった。

「小林が交通事故で亡くなった」

「そうですか」

連絡も取っていなかったし、どちらかと言えば苦手なタイプだったから、それほど驚きはしなかった。ただ、深く、同情した。順風満帆だった社会人生活に、こんな形で幕を降ろすことは、彼はもちろん、彼に携わる人も全て、不本意だったことだろう。

葬儀の予定をメモに殴り書いてから、ぼくはビスケットをポケットに仕舞ってアパートを出た。

あの日からも、黒猫はぼくを出迎えてくれていた。ただ、愛想が悪くなった。えさがないとわかると、さっさとどこかに帰ってしまったし、えさを平らげるとそっぽを向いて眠ってしまった。それでもぼくは、一日の終わりに彼に会いに行くことを楽しみにしていた。頭や背中を撫で、迷惑そうに見つめられても、懲りずに毎日彼に会いに行った。

今日は先客がいた。黒猫の他に、やはり薄汚れた白い猫がいた。そいつはまるで、そうしていないと死んでしまうかのように、捨てられた段ボールで爪を研いでいた。

お仲間かい？　塀の上で行儀良く座っている彼に言う。

黒猫は鳴かない。やっぱり、嫌われてしまったみたいだ。

ぼくはビスケットを取り出し、手のひらに乗せ、白猫に差し出し

た。
白猫はぼくを見ると
「あああ

#17：セルフ・サービス

深夜を少し回ったころ、牛丼のチェーン店のカウンターで並盛りとサラダを面倒そうにつついていた。やっぱり卵か、もしくは鶏そぼろ丼にしておけばよかったか、と後悔していたとき、それは始まった。

オレの目の前で、レジの金を数えていた大学生風の青年に、厨房から出てきた同じくらいの歳の女が小声で話しかけた。

「昨日は遅かったね」

「ん……」男は勘定を邪魔されるのを疎ましがって、適当に返した。

それがいけなかった。

ねえ、と女は言葉尻を吐き捨てるように言い、男を無理矢理自分に向き合わせた。

「どこに行ってたの？」

「何がだよ、仕事中だぞ」

しかし客はオレを含めても三名しかおらず、メニューは出し終えており、誰も食べ終わりそうな気配はない。勤務中であっても業務は終わっている。もっとも、女の方は、だが。

「たっちゃんの家にいたっていうの、嘘なんでしょ？」

「レポート教えてたって言ったろ？」

「だから、それ嘘なんでしょ？」

女の語気がゆっくりと強くなっていく。目の前でこうも熱くなられては、食事どころではない。しかしそれは思っていたより嫌なものでもなかった。

「なんでそうなるんだよ」

切り返した男に覇気はない。劣勢で、実際に非もあるのだろう。つまり、彼は昨晩、たっちゃんの家でレポートなどしていないのだ。

「さっき、たっちゃんからメールが来たもん。レポート教えてくれないか、って。昨日リュウ君に教わったんじゃないの、って訊いた

ら、教わってないって返って来たもん！」
　それは男が悪い。持論だが、嘘はばれた時に罪になるのだ。どうせ嘘をつくのなら、絶対にばれない嘘をつくように努力し、工夫する義務がある。それは大変なことだ。どうせばれないだろう。男の甘い考えがこの修羅場を生み出してしまった。典型的な自業自得。
「だったら何だって言うんだよ？」
　そこで開き直るかね。女なんてのは、意見を聞いてやって、平謝りすればそれなりに許してくれるだろうに。１万円程度のプレゼントでフォローすれば万事解決だったのに。
「どうせ、ユカと会ってたんでしょ？　着信もメールも、ひっきりなしに来るもんね！」
「オマエなあ……」
　バツが悪そうに目を逸らすフリをしながら、オレは監視カメラの位置を確認していた。カウンターのど真ん中で言い争いをしている二人の姿は四方のカメラで完璧に捕らえられている。後日、責任者がこの映像を見たら、即刻解雇に違いない。二人にとって、三年は笑い話にできない、特大の汚点となることだろう。
　ふと、カウンターの最果てで牛丼をもりもり食べていた、二十代後半の、浪人生のような男と目が合った。浪人生はオレに一瞬アイサインを送ると、親指で喧嘩中の恋人を指した。
　何のつもりかわからず、オレは視線を手元のどんぶりに落とした。喧騒に紛れて、水が大量にノドを通る音が聞こえた気がした。
「いやあ、ごめんね、リュークン。こんなことになるなら、やっぱり無理に誘うべきじゃあなかったかなあ」
　思わず米を吹き出した。口を押さえて目をやると、先ほどの浪人生がへたくそな愛想笑いを浮かべて頭を掻いていた。
「……は？」
　女のそれは客に対するそれではなかったが、男は浪人生の助け舟に飛び乗ったようだ。
「ホントですよ、先輩。オレみたいなの連れてっても何にもならな

いって言ったじゃないですかぁ」
「いやあ、メンツが足りなくってさあ。でもやっぱり、合コンで女の子に不自由させるわけにはいかないからねー」
大根が2本。
こんな嘘は大罪だ。昨晩合コンに言ったのなら、浪人生の身なりはもっとらしくなっていなくてはならない。ぼさぼさの髪、汚い無精ひげ、これだけ離れていてもわかる体臭。彼はつく嘘を間違えた。麻雀とかにしておけば、まだ言い訳になったのだ。
女が笑った。
「あ、そうなんだ、合コンだったんだあ」
普通の女なら合コンと聞いただけでも激怒するはずなのに、彼女は違った。確かに、先輩から無理矢理誘われたという設定で、且つその先輩が目の前にいるにも関わらず、怒鳴り散らすのは賢いとは言えない。
「先輩からの誘いじゃあ、仕方ないよねえ。私いつも、合コンだけには行かないでって言ってるけど、付き合いじゃあ仕方ないよお」
女の目は笑っていない。浪人生の笑顔も引きつり、男は額に珠のような汗を浮かべている。
「ところで先輩。学校内で観たことないですけど、学部はどこなんですか？」
「ん？」
文字が斜めになったような声を出す浪人生。
すかさず男が助け舟を返す。
「オレと一緒ですよね」
「う、うんうん、そうそう」
こういう、公開コントかドッキリの類だったらどうしよう。そう思わざるを得ないほど、浪人生の慌て方は滑稽で、女の話術は秀逸だった。
「経済学部ですか？　何年生？」
「そうそう、今三年生」

女の目が一際大きくなった。
「リュウは専門学校生で自動車整備科なのに、おかしいですね」
王手詰みだ。
浪人生は静かに俯いて、それきり表情を見せることはなかった。男は男で、痛烈な舌打ちを鳴らした。いい身分だ。
女は―……ああ、どうやら呆れてしまっている。両手を腰に当て、つまらなそうに怒っている。いよいよ、血の雨でも降るのではないだろうか。
「ユカのところに行ってたんでしょ？」
もう、女に敵はいない。男は即興の嘘をついてでも、真実を語ることを避けた。それはつまり、それだけ真実を語れない理由があったのだ。流れとしては、くだんのユカという女性と会っていたのだろうが、さて。
不意に、女の視線が刺さった。何を観ている、というよりは、観察するな、と警告しているように見えた。オレはつんと表情を尖らせて、すっかり冷めてしまった牛肉をひとつ頬張った。
「いや、実は―……」
男が口を開いた瞬間、窓際のテーブルに独りで座っていた中年サラリーマンが立ち上がった。
「いい加減にしませんか」
毛には白いものが混じり、目と眉は困ったように垂れている。しかし口元は堅く結ばれ、握り締めた拳とシャツから覗く首は小さく震えている。
「ここは飲食店で、あなた方は店員でしょう。客の目をはばからず喧嘩をできる立場にはないはずです」
年長者らしい意見だ。そして年長者らしいＫＹっぷりだ。今、リュウくんはやっと真実を語る決心を固めた。それで丸く収まるはずだった。あれだけ咄嗟に機転の利く女だ。真実さえ話せば、頭ごなしに否定し尽すような真似はしなかっただろう。オレは、推理小説で真犯人が殺されてしまったときの、あのもどかしさを覚えた。

結局、リュウくんも自分のつま先を見つめてしまった。女はとうとう腕を組んでしまった。浪人生は財布を取り出したまではいいものの、支払うタイミングがつかめずおろおろしているし、サラリーマンは誰も聞いていない説教を続けている。

麦茶で口を流すと、不意に閃いた。

どうしてどいつもこいつも、他人に関わりたがるのだろう。浪人生はしゃしゃり出る必要のない場面でいい人を気取った。結果は裏目に出たし、本人がヒロイズムに酔いたかっただけかも知れないが、あれは紛れもなくひとつの親切であり、同情であり、優しさだった。

サラリーマンはどうだろうか。あまりに自分の常識と離れた連中に業を煮やし、我慢できなくなったと見るのが妥当だ。だが、あの気の弱そうな顔だ。普段から何か、ストレスやらフラストレーションやら溜まっていたのだろう。それが爆発してしまったのが、たまたまここだっただけ。しかし直接ぶつける必要はない。今、彼は説教ではなく愚痴を零している。結局彼も、誰かに話を聞いてほしいだけなのだ。

女は、恋人のリュウくんを独占したかっただけだ。いや、もっと柔らかい感情かもしれない。理解したかったとか、常に真正面から向き合ってほしかった、とか。彼の中に、手の届かない箇所があることが、寂しいのだろう。

ではリュウくんは。

「昨日はさ、給料日だったろ」

「それが？」

彼は、エプロンのポケットから、長方形のお洒落な箱を取り出した。

「ちょっと遅れたけど、誕生日プレゼント。おれ、こういうのわかんないからさ、ユカに意見もらいながら選んだんだ」

オレは牛丼を掻き込んだ。なんじゃそら。

「……リュウ……」

なんと二人は抱き合った。それでいいのかお前ら。

突然、浪人生が拍手を始めた。おめでとう、と連呼しながら、店の規模を考えていない、自己満足の拍手を鳴らし続けた。
やがて、そこにサラリーマンも加わった。先ほどまでの自分を諌めるかのように、ゆっくりとした、やわらかいものだった。
リュウとその彼女は、そんな状況にいるのが恥ずかしくなったのか、ぱっと体を離し、照れくさそうにもじもじした。
オレは麦茶を最後の一滴まで飲むと、急いで財布を取り出した。小銭で足りる分しか注文していないが、面倒だったので千円札を取り出し、伝票の上に置いた。
男がはっとして、店員の顔に戻った。
「あ、すいません、今おつりを……」
「いらねえよ。ジュースでも買えば」
睨み付けるでもなく無視して、オレはそそくさと店を後にした。
夏とは言え、夜はそれなりに涼しい。もし季節が梅雨でなければ、それなりに爽やかな夜道だったのだろう。もしオレが昼間、別れる決意をしていなければ、それはそれは美しい星空だったのだろう。
携帯を取り出す。サイレントモードにしていたので気付けなかった、何十回という着信。
駄目だ。
完全にあてられた。
煙草に火をつけてから彼女の携帯を鳴らす。コール音を聞きながら吸う煙草の不味いこと不味いこと。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6509d/

セルフ・サービス

2010年10月8日15時31分発行